

320
137



始



特207
847



紙手きし美
りよたの—アウロク子女





あはれの目も月見星

あはれもさくらさくらの月

見へた、こころの平にお伺ひます。

あはれおぼしきこころを母様。

こころから。おんこころの乳をのちかき、こころのこころを

|| 若き女の体 ||

紅つげ、母は待たせ

目のまは何かいふ

柳も、何かに立ち

吾と抱きつ、こころを

のたまひき、見よ

は、こころのまは金小

こころのまは金小

あはれこころ、歌ひて

海がまは、母のま

おんこころのま、こ

父は、母のま

まがれて、かくは待た

紅つげ、おんこ

うら若き母はおは

x

x



窓から

ーベト草ー

ニホシは辛いでせう。

ゴムの木のニホシの気候は可愛あですわ

ココモリ枝と交えたゴムの木ー

校庭のゴムの木ー

背中に一ぱい秋の気とはらよきて断けて来る小年の列

オヤ一人かと思つたら赤后からー后からー
 どの小年もみんふ真白い。ヤツときて、丁度紙でこした白
 い舞のやうにヒリヒリ。跳躍場のまわりと舞つて居る。
 至^ホ入だ空ゆくに顔とつけて眺めて居る私。私は今年
 女学生校とおまじたるの

チカチカく空石でと交つて居る。跳躍場の砂、あの
 砂とらと少年の足は鳥鹿のまじり。
 小年からー女の運動靴、あれは度下やぶいズツクたか
 らも回つてくる。

何處で赤い日の丸の旗がひるかへて居る校に幸福
突如、僕が——つて降ひあ——たい程私の胸はヒキク
て居ます。

金棒が滑んだら今は何バツテですか。

ひい、ふう、みい、よう四人飛ぶいのね。私を手傳つてあげ
たいけどー。

恥けて行く足許り見つめて居ると妙に目の中でじんがらう
てあなたさまがころんだ様おサツカクにとらはれた。

此の木の蔭のセトダの樹——

散りおくれた細葉が吹雪の枝に散つて私の大切おさまの

海を切れ切れにする。これはまあつとて——もう駄目よ。
時了が来たもの。

ベルが鳴つたら、あなたさま少年ははきんだゴムマリの様に急い
て校舎の方へ馳けつけて行ったー。



紅っぱき白っぱき

くれら

ふっと見上げた空は深かった。

あなた私のセツの春

朗かふ大空と 花の紅の草花とのすそをさやうに
風が流れて行きました。花の紅の、白の、一ぱいつけた
椿がこたもこたも里のまをうらぐらして居ました。

—和さん男でまから白いのにおさいね—

—うん 道ちゃんはお—

二人はもう赤あ唇から白い歯をこぼれる程見合せのくら
には—さうに落つばきを拾うては縁にとほ—きました。

—少—位までおれでもい—でせう 和ちゃん？—

—やだ—お姉さまの冠がはくぶつちやあ アハハハ
か承知—あ—

—サ—

椿はいくらも、いくらも 落ちて来た。甘ったろい花の香と
ふくんだ風が 道子のふきふき—たあめうばと、もう赤の
セーターの向から—のびこぶ友に、きいろい声をあげて
は 和夫をふりかへり見た。

—じつとして居ふまやあ 然目だ、えんぶたお行儀がわ
ろくちやあお姉さま—と上げあひよ、どうだ—
この首飾は—すばらしいとんだ、どこの国のお姫様だ

つてと人ふ素敵のを持ちて居るにせー

白く迎をつけたゆいま子は小さい蛇をふかめてふいーさした
つぶやいたのでーた。

ほのかさ若くさの原にはやはらかな夕陽が息づいて
まてお仇活しゆまにゆいま子と蛇はたはたさ幸てあつた。

あささ色にたはれた空は糸のやうな流水雲がかすかに浮
んでおきた。

x x

十五の春を迎つた二人

新水の茶室のまどをぬぐる故車のつばき

ー和やんホラあゝこの大きいのあれとて頂戴、さく

このまろ赤ぶのよー

長く背丈のじだあなたゝの体がまろ思ふ大きい茶室のかげにのく
れて面長の顔を映はすとらうらほさぬみました。

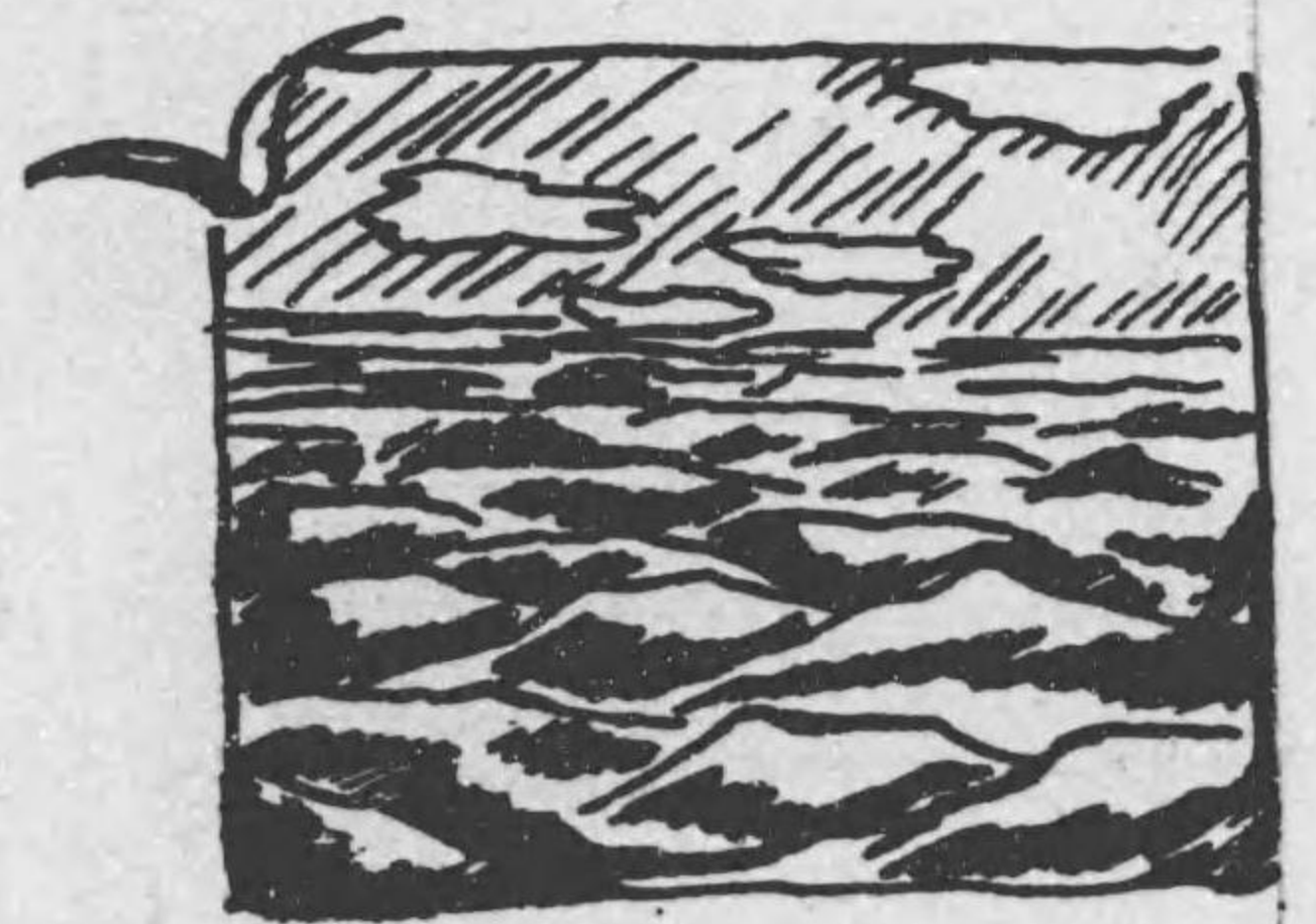
ーいつかい投るよー

かゝるい曲線とまかくとまろ赤ぶ花が大きくひろげた私の胸にお
ちて来ました。二人は花をすいきました。

ー甘いのぬー

ー是ちも人の手は白い象牙のやうだなやー

燃ゆるまろ赤花片の埋れた庭子の白うらほさぬまたから



北国へ

ナヤンふらー！ レルゲイヤー

血の混た海と彩りて港の彼方へ即崎に洗みゆく 夕陽は
 だはたと櫓にちい国旗とゆする初夏の海風に、静に
 大渾の天ま堂ふら御苦きまら夕か祈りの鐘オリエタル

ホテルの窓には黄色い灯が瞬きこめて、まがり言い
 ハヴァナを廻らせつクキリドに細い杖と叩へた青い瞳
 の伊達者が、ハラハラと鈴鐺の教歩道と口笛吹くと
 返りゆく。

Vow! Boo—oo—

木帆の洗笛が魂まで浸み添る夜に御言いて来ます。夕陽に
 かすむ三波止場の棕櫚の木の下のペンキに腰かけてあな
 たはきつとサファイヤの様お瞳にこのエプス・オヴ・エルク
 サンドリヤの甲板と見つめて居るに違ひない。ナヤンふら
 ぼくとつたもうお別れです。

故国を遠くはなれてこの東の国の果の港に暮るる
 妻は南の海とあははする碧い瞳に泪とたぎりやるせ
 むい御愁の淋しきと語りてくもたもももありやうた。
 牧場に寝るくまの屋。大まふ平、紫たかまはさく山
 陽炎まらぬの牧場。夕陽赤々と照る埃のい妻女はあ
 けけい瞳にあがれの童話の国を追い下シエト河の堤防に立
 つて可愛い歌をうたふ。遠くの山嶺に雪が下りて白毎に赤務が
 深くあつて来るを裾割の大まふ風車の下を肌さむい夕木靴
 と穿いて凍えさふ足で近所の子等と駆け廻りおどろ
 かいでん海のあるたの故御私しつつか一偲に涙いむのでいた

This very wonderful goot, むい妻女は本のKとP
 と発音—下らぬイキカカンのアリスの冒險を私にうけてまかせたの
 しんてん—だ

...3032i|12|76|74—74—
 3343|33432|i.767i2|3-3...

船室の窓を透れて来るサシマゴワルツ。哀調をうくんだハハ
 一マ茂る南の島のエキバツクナ—の調へよ。椰子の林に眞
 の群、魔法の珠とまげた奴隷の妾控ふ模様の瓜哇更紗の
 カーテンに映る港の灯—
 海たかありて新瀬に

文化と西の国人が

この港へ伝へた

支那の赤い山門、伝きくの香たよふ支那人街、豚尾

の背高い、節まんの吹きあらすキヤルメラ、和蘭会場の

お城の標ぶ商館なんとエキヅチックなこの港よ、本当に港は

あなたに淋しかった……

奥女が求むたべつ甲斐上の帆舟、絹布の刺繍、眩い

Brocade — この水は私にも魔法の宝の様だつたもの。

— 君のやかみ夜愁曲、掻き鳴らすバンジョー

又倉庫に大きくくると輪を描く造船所の起重機の鉄

板を落す音、港にちやつた空色の米国の印用船

黄燈突の駆逐艦、けたまひ音を立てて港内にかへ

りゆくモーターボート、女神の岬の燈台にはもう灯がメリ

チヤタ。大きなマドロスパイプを口た、ナツキから大きな音を

バンジョーと掻きあらす琥珀眼の船員はキント遠い故国と

思つて居るにちがひない。

これヴィアよ、そして奥女はキント長い睫をた私の船の煙を

みつめて居るにちがひない。

想の虫の黄全(トランドタ)国は悲し、奥女と手をついで行つたカレ

この夜櫂、ぼんぼりの歌に浮かぶ未塗の櫓はたまらぬ
哀愁をひびくと傳へて来た。精霊流の音、古び
た眼鏡櫓の水にうつる燈籠の灯の海にあなたを頼はぬ
れて居ました。天守堂の伽藍にリュートガラスの陽を浴び
て祈る貴女の姿は清いものでした。

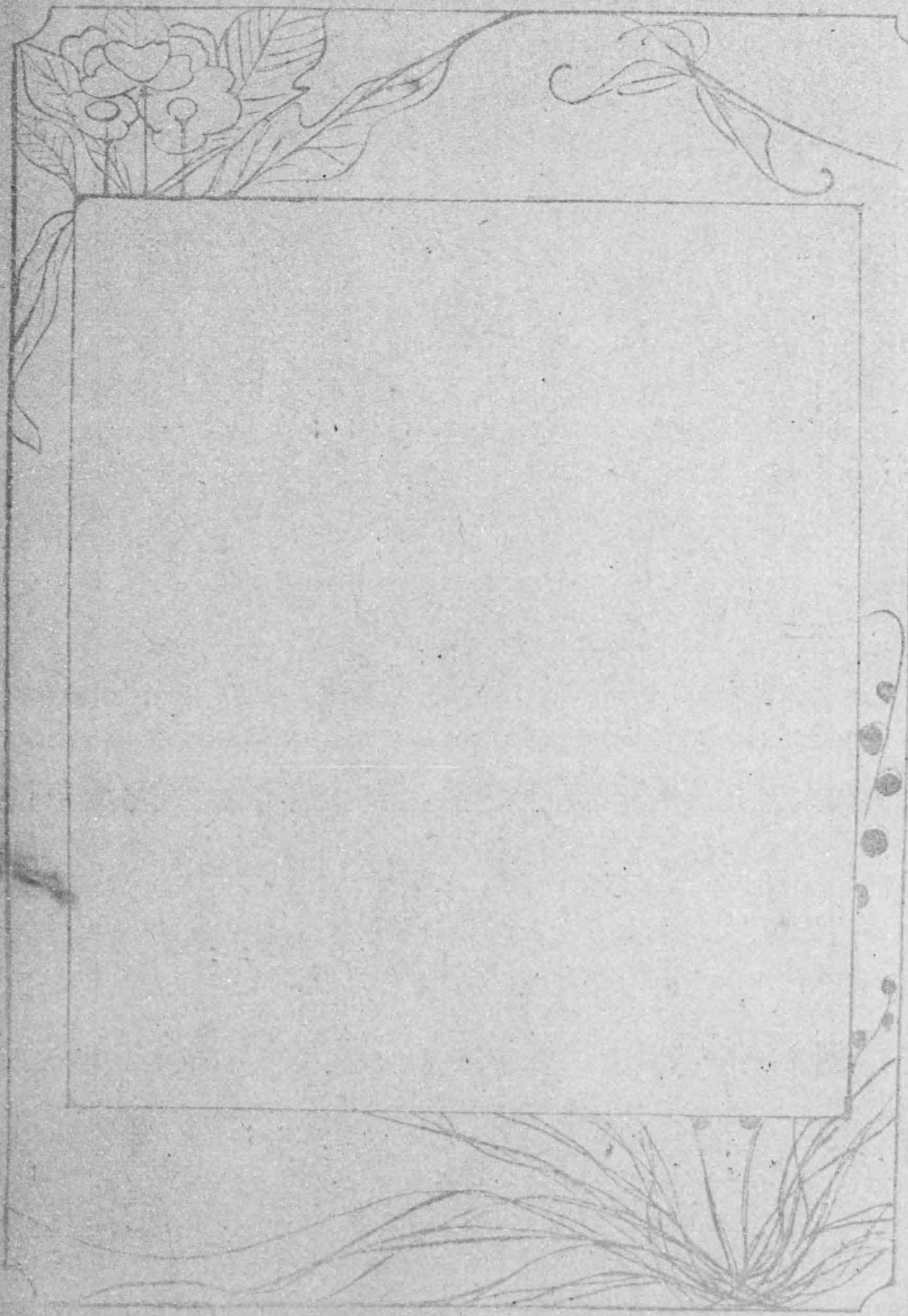
遠くありゆく天守堂の銀色の夫塔、丘たむびゆるスウー
ルのオリブ色の校舎、船尾に渦巻く夜知小の紺
碧の波、群る鴉も次々に岬の彼方にかくれゆく。

落つる陽は今最後の名残を燃ゆるやうにあくこゆ
きし海も——果知小ぬ玄海灘、——て彼方に不知火も

ゆくと小流紫海、あゝ私の墓と相ひ出るとのせいで船
は北へ北へと羅針をまがす。

“Boo—Woo—oo!”

必みゆたる汽笛、異国の港に貴女のたつた一人の足跡つ
た私ももうやまうぶらです。又冬は日はくんと知ることはお
まぶら弱い人です。ベータのいよつて貴女はキーン、ア
ウエルのハコカキを振って居てせう。アディーネアディーネ、ま
り鳥よかみつらしたスリルよ、ブロード島のレニグイアよ、南の
古い港町よ——レニグイア、祈りておまへ。今来るこそ私に幸
かおどしきまもるよ、お船は乗るよのまも。北国へ……南へ——



——本書の初めに——

若き人のためにこの（クローアウーのたより）を編しました。收めた手紙は雑誌や懸賞で榮譽をになはれた文章ばかりです。知名の方のもあります。新人もあります。それはキツト若い多くの乙女達の心臓にヒシ／＼と肉迫して行くべき叫びです。乙女たあよ、清く純であれ。美しく楽しくあれ。そして幸で永くあれと祈るのです。

多摩川の書齋にて
……むらさき……

美 し き 手 紙

子 女
クローバーの便り (目次)

初めて髪結ひし日に..... 一

若くは母となつた友に..... 三

若き母の佛..... 六

窓から(ペロ草)..... 九

紅つばき白つばき..... 一四

北 國 へ..... 二二

星はみ空にかじやいてゐる——野には小鳥がうたつてゐる——
 風にも、水の流れにも、——統てに美しい箱があるものを——
 あはれ、人のま心こめた消息に………
 |||| リウゲツ ||||

春の野邊から

まあお姉さまおきゝ遊ばせ。

小鳥が春の唄をうたつてをりましたの、そしたら氣取りやのバイオレットが首
 をかしてきて居るんですもの、ほんとうにいらしいではありませんか。
 かうした春の暖かさで、静かな野邊にたゝずんで居りますと何んとなく遠い夢
 のお國にさまやうな氣がいたしますなるといふ輝やかしい光でせう。

淋しい惱ましい冬の日は何時のまにか遠いところへ去つてしまひました、桃色の霞においやられて……。

お姉さま私の心には今あふれる程幸福が泉のやうに湧きいでてをりますの私、ほんとうにあの日、お姉さまにお顔をあはせるのが、さまりが悪うございました——なせつてあの日差上げた手紙をごらんになつておいかりあそばし、お庭でお逢ひしても「無言のお別れ」なさりはしないかと思へて、かよいい柔手若菜に似た私の心はゆれて居りました。——私のおくびようもの——お姉さまのみやさしい言葉に私のみにくい心のわだかまりは野邊の淡雪のやうに消えてしまひました。私お手紙出してからどんなに心配したことか！

お姉さまのお手紙——それはバクダツトのお姫様の占ひ、すなほんのばらのやうに——私の心の中には清いあなたの白薔薇が幸福として占はれました。

(かさねもじうしのつのもじすぐなもじまがりもじとぞ君はおぼゆる)のみ、ふみお姉さまジャックは豆の木で昇天しました。文子はその三十一文字でお姉えさまのみ胸にエンゼルの幸福の矢のやうに——

私はお姉さまを誤解して居りました。そして目の覺めてゐる時の空想よりも夢の中ではつきりお姉さまに抱かれる幸福を夢みるのでせう——夢のお姉さまに抱かれた文子は覺めてさびしい獨りぼつちを悲しみましたのよ。

お姉さま、私ひとり淋しくとこやみに悶えたときのことを告白いたしませう。私、實はお姉さまに愛されてゐないやうな氣がいたして居りましたの、冷たい石の下に芽ぐむわか草のやうに悲しい境遇にあるのではないかと思へましたの。あなたの瞳がみ空の星のやうに輝いて居る時私はどんなに幸福な子となりましたでせう。お姉さまの瞳か古沼の面のやうに底しれない冷やかなさに見える時、

あらしの中の小舟のやうにおのゝきゆらめいて居りました。
 若草の萌え出づる様に私の戀の若芽はお姉さまの愛の雫にまろこがれたことか
 すきま明るきガラス窓をとほして闇空の星におねがひしてふと訪れたわが胸に
 やごる愛の小鳥を抱きながら、お姉えさまのみ心の傾かんことをおねがひ致し
 ました。

私には悲しい日がつゞいて居りました。——「人々の不幸には際限がない。し
 かし幸福には限りがあるやうだ」——とさる人が申しました。私がお姉さまと
 おしたひだしたのは枇はのさく頃——お姉えさまは校舎の裏の影ふかさ枇はの
 樹の梢をながめてゐらつしやいました。

お姉さまの美しいまなざしは朝露のやうにうつくしく輝いて居りました。それ
 から私は幼の泉にあなたのみ姿をうつし熱情の涙を私のひとみから——

夜になると私はほんごうにたえられない淋しさ、やるせなさにもいつも寮舎の裏
 のやみでお姉さまのお名まへをよんでみましたの、亦あるときはこんなことも
 ございました。

薄命の淡雪が——

さら／＼と川面に消えてゆく、川面に消える雪のはかなさが何か胸にしみ
 て悲しみにとざされる。

かうした宵、悲しみにとざされた心の中に

秘手函の中からなつかしいお姉さまの心を描き

みどりのカーテンに包まれて泣きました、

私、姉様の愛がどんなにうけたかつたでせうか、それは宵待草がああやさしい
 お月様をおまちするやうに、でも私には宵待草のやうにかならずお目にかゝる

と云ふたのしい聖約はありませんでしたもの、
お姉さまも許し下さいませ。

文子はあなたがお友達の皆さまからしたはれてゐらつしやる時に、なんとなくお姉さまがうらめしうございました、こんなにお慕ひ申してをります文子を御存じないのかと思ひました。

——ほゝゑんでちつと見つめたお姉さまの瞳が文子さまにそむいた時私の心はあやしくときめきました。

あゝもしかしたならば、狂はしい私の心のいたでは日に／＼大きな波紋となつて暗いやみちにひろがつてゆきました。

深海の沈鐘は再びなることのない歎きのやうに——

こんな輝かしい春の野邊にかうした、淋しい思出をお姉さまにお話するぶしつ

けをおゆるし下さい。文子の幸福をうら書する大切な物語なのです。

お姉さま、お姉さまのおすきな加藤さまを先生のおかさになる繪のやうな野邊に文子はいつまでも／＼たゞずんでお姉さまをおしたひして居りますの、

お姉さまと楽しいあやくそくの日をまちこがれて居ります。

ひばりが麥の畑に高くあがりました、そのひばりに、妹の文よせて、……

はるか遠き君へ

夕闇がしづかに音もなく迫つて来て、窓のカーテンが微かにゆらぐ頃、又しても想ひ出されるのは過ぎ去つたひととせ！まだ相知らぬ二人でした頃！

夢のやうでございましたわ、清いお交りを互に心の底から偽りなく出た言葉で

したけれど！
 二人は疑ひもなく素直にその言葉を受け入れてしまひましたわねえ——え、それでもよかつたんですわ。幸福でしたわね！——そうして去年の暮、二つのお人形が二人の心をしつかとつかんだとき交換されたのは！
 お人形は大きな大きな使命を帯びてあたしの手許へ届きました、さうして遠いはるかな貴女にもね！——あ、それからあたしからのお人形はたうとう函の中で首がとれて、泣きましたわ。だつて悲しくて悲しくて、でも貴女が上ず首を結んで下さいましたわね。

二人の心はしつかりと、とけないやうに強い——くさりで結ばれて行きましたそれから今年になつて幸福なお便りが幾通か交されました、貴女からのお便りは赤い手函に温かく美しい夢を見てをりますわ、さうして今日あなたのうつし

えをしつかといてあることが出来た私の胸はよろこびにおどり狂うほどです、わかつて頂けますわねえ。あたしの心が！
 あなたのみの私であることをお誓ひしたその日からあたしの身体はあたしの身体でなくなりました、あなたと二人の身体ですものね。
 幸福ですわ、幸福ですわ、あたしの胸はどんなに喜びにふるえてあることでせう——たくさんの喜びを私の胸につくく味はうとしてをります。今宵も寂しいまゝにまた想ひ出のかずくを心にくりかへして居ります。

お母さまへ

神秘的な波の音が夜のものの凄さを語つてゐます。たつた一人眼をさましても思ひする子の周囲に――

よせてはかへす殺風景な海をもの思はしげな、うるみのある月が松の梢で海を見つめてをります。――私と同じやうなひとりぼつちで私と同じやうな思ひで私は波の音をきながら、お母様の寝物語に耳をかたむけたあの頃が懐しうございます。

あのね、お母さまに死にわかれた王子さまはね、……ソラ……あのやうな濱邊で泣いてゐたのですつて……

大きいなりをして、甘えたあの頃がどんなに懐しうございましたせう。それは淡い昔の夢にすぎませんでしたのね。

玲子は故郷にゐる間だけ、自由が許されてゐるのですわ、お祖父さまの慈愛に

みちたみ胸に抱かれてゐる間だけほんとに一寸の間だけ、家へかへれば、私の凡ての権力は冷い瞳の方のためにうばはれてしまひますもの玲子はいつもながら哀れな子ですわ、義理と云ふ冷たい瞳が私を睨んでゐるのですもの。

氣苦勞多い生活にお疲れあそばす母様の衰へきつたお姿がありくと浮びますのを私はどう致しませう？ 玲子の悲しい胸をお察し下さいませ……

將來多い玲子は楽しく生きる方法を考へませう。ホラお母さまおき遊ばせ、丸ちやんがクンクン泣いてゐますわ、お乳をたづねて……玲子の心も丸ちやんと同じですわ。

ものにおごえきつたやうな波の音が今まできこえなかつた私の胸につよく悲しみを起させてゆきます、恐しくなりましたから、今夜はこれで失禮いたしますではみ健に。

夜汽車にて

リタ・ジョリウリ

ひびき来る、つんざくやうな氣笛にいく度か破られた千切れ、千切れの夢をのせて、列車はいま眞暗な夜の鐵路を南へ南へとひた走つて居ります。

よう——姉さま！

リタは北の都を去るのでございます。

凡ては夢でございました。みんな淋しい強い性の子故に——

先生にも、學校にも……友達にも……いゝえ古い傳統といふ殻の中に生くる人

たちの群を自ら去つてゆくのでございます。

入れられぬ淋しさ——

さはれ、そは若き革命者といふ名によつて慰めえませうけれ共故郷をもたぬ子の四年のち、住みなれた第二の故郷とも云ふべき高原の都にわかる戀しさはどういたしませうか——

靜に、靜に考へるとき、異端者といふ名の下に受ける人の瞳の冷たさにいつそすべてをあきらめ捨て常に心ではあはれんで居た人々——たゞ先生の偶像の己れをまげて傳統のルツポの中に校風てふ型に入れられて固りゆく人々の中にはへなりともと思つたこともございました。

けれども、父のつとめのために小學校を八回も變つた私……幼くしてコスモリタンの自由性と變る度ごとに受けた級の人々の好奇の瞳に對する反抗性と一人

ぼつちの淋しさを植えつけられた私の心は壓され、ば壓さるゝ程胸の中でもえ上つて居りました。

静に半年は雪の中に埋まつてゐて眠つてゐる北の都のスクールには私の存在はたしかに脅威でしたのでせう。

老いた裁縫教師の氷の腫、雪を交へた修身の先生の針のやうなお髯の下に皮肉に笑ふ冷いことば……そして校長先生派と教頭派との醜い暗闘……

學校を清くしませうといふ事は、みんな私たちが持つてゐた筈でございます。

それなのに最後になつての段の中のさゞえの方々は……そむかれた子は唯黙して學校を去りませう。

時には裁縫の先生にも、修身の先生にも、體操の先生にも、また校風てふ柵の中の小羊たる方々の御心にも涙ぐましい程……何んと云ひませうか、あの方達

にとつてはあゝ云ふ風に傳統の古き垣にいましめられるのは仕方がないと同情も強く感じる子でございますとは云へ止むに止まれぬこの心……

降りしきる窓外の雪をついて響き來る咽ぶ様な流笛——その吹雪の中にまた、いてゐるのはアカシヤの都札幌の灯……三角山のなつかしいスキーの想ひ出——

——ジルヴァヤンツエに雪烟をあけたジャンピングストップの想ひ出、美映の丘に鈴蘭つんだピクニックの日もあゝあの山の麓にきらめく文化村の窓の灯と共にやがては追憶の吹雪の中にまぎれゆくのではございますまいか——

修學旅行の夜、宵ふける迄さまよつたアカシヤの都札幌もとうとう遙か後になりました。思へば鐵路幾十哩、なつかしい四年の間、淋しい子の夢をはぐくんでくれた旭川に、また會ふ日とはいつ來るのでせう、冷たい闇に光るレール

同じ道をいく度どんな思ひの人をのせて運んだことでせう——

よう姉さま、——

姉さまと懐しい日をすごした北の都はリタの胸にはいつまでも胸にひめて置きませう。

青いシグナル、小驛のカンテラの黄色い灯、後へ後へと取り残して急行車は涙の子を涙の夢をのせて……

あゝ木當に淋しうございます。

翔風丸から

朝まだき、霧深い港の町函館に汽車は静かに車輪を止めました。もうここは雪がございませぬ。まだ電燈がにぶい光を投げてゐる待合室のあわたしい中に一人静に物思ふる心——

よう、姉さま——

眠つて居る町の家は霧の間にかすかに立ちならんでゐました。そして巷にもやつてゐる船の舷燈の美しさが水にゆらいで——

バスの太い汽笛——鳴りわたるドラ、さうして錨をあげる響き——上甲板に出て船尾に消えゆく水泡をみつめる子の胸には今朝からの光景が走馬燈のやうに入れかはり現れてまゐります。

銀ねず色の雲の間から白金色にかゞやく北海道の山々……

憂の國にゆかんとするものはこの門をくぐれ——何ゆゑにダンテはかくは言ひ

しか

わが前に物なし

唯無窮あり。

われは無窮に忍ぶものなり。

この門をすぎんとするものは一切の望をすてよ。

あゝ悲しい勇ましきあきらめの言葉。

風よすすべ！ 濤よ荒れよ！ せめてこの船のくづるまで――

灰色の海、灰色の空、そして灰色の私の心――

たゞ光るのは北海道の連山、過ぎし日の想ひ出はあの嶺のごとく、私の心の園

にかゞやいて居りますものゝやがてはやるせない夜霧のやうなノスタルチアの

中にかくれて――思ひ出はかなし、古き港門にすむ碧眼の子、そして淋しい子

の幼い友のシルヴァアよ、また貧しい心の糧を永遠の友と盟つた、よう姉さま
異端者てふ名の下にうけた冷たい瞳の中にあたくかく四つのひとみ！

よう、姉さま。

もう胸が一杯でございます。さやうなら。さやうなら。

また姉さまにお目にかゝる日はございませうとも、幼い夢をいなく、リタでは

ございませぬものを、みな水泡の上にむらがる鷗、霧にまたたく函館の灯……

津軽海峡の風はほんとうに寒うございます。

バラ色の窓

よう姉さま——

藤原氏の築いた幻の都、奥羽歴代の榮華にうたはれた平泉、一の關を夢の間にすぎ、露の歌様によつて深く胸に秘めた森の都にまたく灯を、ひびき來る汽笛はぬじりかねてゐる涙の腫にかへていつか夜はあけに近づいて居ります。古い沼の静寂をたへた時、水郷土浦の驛をすぎて窓外に一面にけむる霧の間から、かすかに沼にうつる灯かげが見えてゆきます。

何んと云ふ清い朝でせう。うすら寒い霧は私のひとみをはつきりとあけてくれました。あゝ東の窓はクリーム色になつて霧がだん／＼と消えてまゐります。あと一時間で東京へつくだのです。四年ぶりに見る東の都はまあ、どんなにして私をむかへてくれるでせう。

すつかり晴れた霧——ビングの空にそびえた紫色の遠山の端かうつくしい薔薇

色にかゞやいて居ます。

よう姉さま。

バラ色の黎明でございます。美しい人生のあけぼのでございます。今まで淋しかった子にもこれからあの美しい幸福がおとづれて來るやうに祈つて下さいませ。

因襲と傳統の籠を脱れた小鳥にぞうぞ桃色のあかつきの参りますやう、そしてその名も淋しい樺太のウラヂシロフカの街の病院から貧しい小鳥のために暖いひとみで泣いて下すつた姉さまにもたくさん幸福が訪れますやうお祈りいたしませうねえ。

私決して決して道をあやまらないうやうに、姉えさまとのお約束のやうに「清く純に」生きてまゐります。きつと、きつと。

正しい道を力づくよくふみしめて真すぐにまゐりませう。木當にうれしうござい
ます。工場の汽笛やハンマーの響き、いそがしい北千住につきましました。
もう東京のさめゆく心臓のひびきもきこえる様な気がしますどうぞみ幸多く、
でも泣きたいような気がします――

何んと云ふ美しい、そしてつよい文章でせう。雄々しい信念の命づるま
ゝにえらび出した一すぢの路を感慨ふかく歩む、清き純なる乙女の心よ

幸福の春を

乙女！ 乙女なる清子さん！

花霞の奥には揚雲雀の朗らかな聲がたゞよひ、なだらかにふくらみを待った牧
場の柔かい肌を撫でるやうに、柔かい若葉をゆすつて春風が通ります。
蜜蜂や蝶や、いろ／＼の美しい虫が芳はしい花の匂ひをかきわけてあちらこち
らへ飛びまはつて居ります。

食べあきた仔牛は流のほとりへ重い體を横へてねむつてゐてひとみを開かうと
もしないのです。

ぬるんだ小川の流れは少さいリズムを立ててせゝらぎを飛びこし、ちりめんじ
わの小波の上には可愛らしい白堊がやはらかい春陽をあひながら水底の小魚の
話に耳をかたむけて居ります。

春………

春はすべての上に幸福です。

だが……その春の中でも
 かすみの奥にあてがれをひめクロバの叢に愛の象徴をさがし一輪の紅ばらに
 華かな夢をつどり、そして自らが美しく咲き匂へる白堊であるが故に小川のせ
 らぎにも胸とどろかせて頬をさめる乙女の春こそは何より幸福です。

幻になげかくる言葉

清いかほりのフリヂヤを町で求めて來ましたの、貴方のお好きな黒づんだチュ
 ーリップも飾窓にありましたけど。

Yちゃん、なつかしい而影、いつも夕暮になつて青いお星様がポツチリ瞬く

頃になると浮く影、美しい私のたつた一つの……

でも私はあなたのことを忘れようと苦心してゐるのよ、小さい胸にひめてゐる
 幻をたれもいぢめはしないけど、澤山、澤山、あなたの事を考へるのは悪い
 ことなの、私はいけない子でした。あんなにいつもくあなたなの、幻におひ
 まはされてゐたんですもの、朝起きて大空をあふぐ時、蒼いく大空が果しな
 い海邊の様にかはりました。

S 濱なのね、つば広い經木の帽子、眼鏡が浮きます、それがYさんなの……
 あなたと私は一つちがひの徒兄弟同志、小さい時からの仲よしでした。ふるさ
 との白壁の家！ 春の思ひ出！ 二人して花むしろでまゝごととして……美しい
 お家をつくつたこともありました。秋の草の咲き亂れたN温泉の一週間、青い
 芝、きれいな海、横濱三溪園の一日、修善寺、K山、M市思ひつゞくれは限り

ないおだまき！

Yさん！！

私はあの楽しい詩のやうな思ひ出をすつかり、忘れるつもりです、忘れなければ私の心は亂れてくくゆくばかりですもの……もう決してやさしい言葉をかけて下さいませぬ、ほろろみを興へてはなりません。私はあなたの好意が一番おそろしいのです。

若い頃のゆめ！！

あゝ私はそのゆめからさめなければなりせん、私は美しい夢の中に自分を主人公として、遊んでゐたのです、乙女の危険期！そんなことも考へて深い理性をよびもどうさうと闘ひどけたけれど、今までいつも情火のとりことなつたのでした。

Yちゃん！ 私はきつとあなたを忘れてゆきます。忘れるといふことは赤の他人になるとは違つてよ、清いところ同志の愛にもどすといふ事なのです。

Yちゃん、今度の夏休みまでにきつとくきれいな心になつてお目にかゝれるやうにとめませう、苦しい修養をつむのです、くだらない慾情に左右されない意志の強い子になつてお目にかゝりませう。

Yちゃん、外は春です、そこはかとなく霞み渡つてゐる花の横雲、菜の花の黄、山の紫、若草の野、ひばりが晴れくるとないてゐます、力一ばいに……私は明日からこの廣々とした柔い野におどり出ませう。大自然の抱擁に心の汚れをきよめませう。ピーターペンのやうに子供の心をねがひつゝ凡てを忘れてあどるつもりです。

Yちゃん、あなたからのおたよりが四通封を切らずに炎の中になげ込まれま

したの、許るしてね。

何も御存じないあなたは、今頃は静かな松原を抜けて、濱の捨小舟で高らかに寮歌をどなつてゐらつしやるでせうか。或は離室のまる窓で日の光りに青い南歐の物語を讀んでいらつしやるでせうか。

あゝそんな事を考へる事は止めませう。折角とりもどした、平静を失ふといけませんからね。

Yちゃん、小さい百合子さんのお手紙もよみました。

けふも海で白い鷗をかぞへて都のお姉様のことを思ひ出してゐました。

こちらは静かで暖かで、濱邊はことにいゝの砂丘、ホラいつかのね、いつも春の海をながめながお姉様のことを考へ出さんです。

伊豆の山々も浮き出て、あの岬の所もあんなに輝いてゐる姉様まつてゐま

す。春のあやすみにばきつとくいらつしやいね、お揃ひのポックリが戸棚でさびしがつてゐます。

私はお姉様がいらつしやるまで、新しいお帽子をかぶりませんの、ねえお約束してよ、きつとくいらつしやいよ、Y兄さまもまつてゐます。

うれしいおたよりでした、無邪氣な百合ちゃんには心からおわびして又の日まで待ちませう。

Yちゃん

あなたを忘れるまでお手紙を出しません。もう一度云つてよ、忘れると云ふことは赤の他人になるのではないつて……

遠い皆様御幸福に

さよなら

町のポストに出すのではない私の胸にひめておくてがみをかきました。

傷ましくきづついた心を

なを子

一九二六、四、一

その一瞬間

私の世界は急に眞暗になりました。そして總ての私の夢、輝かしい希望と云ふものが、無残にもみちんに打ちこはされて仕舞つたのです。

あれほど堅く信じ、あれほど夢に夢を重ねた、遠い乍も煌々と光を放つて居た強い一點の灯がかうも他愛なく裏切られ吹き消されていゝものでせうか。

連夜の涙でへト／＼になつたかなり弱り切つた心を苦しみもちつと抱いて、いつものやうに白い空を見ますかす時、私の眼にあり／＼と浮んで來るもの、やはりこれは昨日見たのとも、一昨日見たのも少しも變りない、懐しい母校、

あなたの美しい薄いミルク色に包まれたお姿です。

私を見る幻影、それは誰が消さうと力めても何時かな消えるものでありません。私は、唯私の生活をそれによつてのみ生かし暖めてゐる人ですもの、母校……
幻をおふ心の蔭に私は一たい何より深くもとめてゐた人でせう。

「なをちゃんのお母様は？」

「今にかへつていらつしやいますよ」

こんな淋しい會話が十八歳の今日まで、幾度か繰りかへされ、云ひなされて來たことでせう。そして佛壇の香煙にくすぶる黒に金文字のお位牌を又山鴉を友として淋しく氣味悪くねむる山麓の墓石を、焼きつけられる程はげしい印象してゐながら尙幼い日の言葉を、何んの懸念もなく、そのまゝ強い信仰をしてゐた私でした。

實際私はお墓詣りほど厭なものはありませんでした。——私に石を拜ませてだまして居るんだね、私から母様をかくしてゐるんだね、さう思つた時、誰も彼もが憎らしくそれにつれます——母様——貴所のお姿をたよりない印象にまざぐりながら、なほかつ強く色彩しやうとした私でした。

母様を再び私の手に取りかへして見せる——何んの的もない、廣い高い大空に向つて空しく手をさしのべてのび上りのび上りする様なものではあつたといへ私の胸には燃えて渦まぐ一塊の熱がたえず集つて居りました私のなす事、考へる事、そこにはきつと母様の御意志が働いて居りました。何故なら私の持つ母様の幻影には生命がありました。

いつかは相見ん日のあらふことを唯々信じて待ちのぞんでゐたればこそ過去十年間であつたものを……

母様、萬感こめてこうお呼びしようにもその聲は泣しく喉元に引つかつて吐き出せません。

聲となつて表はれて来る前には、それはもうすつかり、涙でドロ／＼に溶かされて失ひます。

過去十年の間思ひさま泣きました。たが思へば彼岸の彼方とかに在す母様、どんなにお苦ししかつたでせう。どんなにおつらかつたでせう。

目から、口から、鼻からドン／＼押し込んで来る冷たい水にも何等抵抗もなさらず、ちつとそのお美しい身を惜し氣もなく沈ませておしまひになつた母様、それは十月のある宵であつたとさゝます。

清澄であるべき十月の日もさぞ曇つたこととせう。鼻は小枝に小さくその身をひそめてちつと息をふさいでゐたでせう。

しかし一體たれとたれとが本當に私と同じ心で母様のために涙をしぼつて呉れるでせうか。

「あゝふみ子は之でいく度死にました」

私の生涯を通じてとも云ふべきこの偉大なる信念、信仰の旗印はもろくもあまりにも豫期しない時期に切つておとされました。

今となつてはもう泣けません。

痛手をおつて、鮮血にまみれる蛇の様に今私の心はのた打ち狂つてゐます。あゝ誰か誰か私のこの胸の血を吸つて持つて行つてくれないかしら。

夢であつて欲しい、夢ならば一刻も早くこの狂はしさから覺めて欲しい。

あゝだが、所詮は望みなき假のことばかり母様、たてから見ても横から見ても唯戀しいこの二字を一たい私はこれから、幾年月間涙ためく眺めてはなやま

しい生活をつとげなければならぬでせうか？
フリージャ匂ふ夕べ痛ましくも傷つきし心にて記す。

最後の手紙

お手紙拜見いたしました。私にくだすつたのではないけれど……

あなたに對して私はこれ以上努力を拂ひますまい。又必要もないでせう。冷き人よ、疑 深き人よ、あなたの思つて居る様な私でないことはいつかおわかりになでるせう……キット、でもその時はもう遅いのです、私は悶えても……私 はあなたのものではないのです。

一九二六、三、一四、あなたも忘れないで下さい。惱んで、怨んで、憤つて、それからあなたを離れた日なのです。情なき人よ。
では、ほんとうに左様なら

詩にそへて

この詩をあなたのお手許にさし上げます。

青いお舟よ、と

清き小川に

笹舟をながして

こよなく喜びしは
わが幼なき日の思ひ出なりき

わがめづる

詩人の小唄とともに

きみが名をしるせし紙片を

笹舟にのせて流せしは

きみありし日の思ひ出なりき

あゝ愛しきつみ

かくめでし青き小舟は

あり、日のかずくの夢をはらみて
あゝいま何處にありや。

心の叫びを

生意氣だと云はないで下さい。
大膽だと云はないで下さい。
こう云はれることがどれ位心苦しいでせう。じつと下唇をかみしめて桔梗の花をみつめてゐる時たまらくななります。
お裁縫つて無暗に云はないで下さい。

お花がかけると云ふ聲がきつたくはありません。今の私にはお立關の格子のあ
く音が一番わすらはしうございます。
しばらくでもご本が読みたい。
胸高らかにしめた紫濃の袴のバンドに今もなほ白梅のかほりも高い校章をか
どやかにして高等科にすゝみ毎日元氣よく通學していらつしやるお友達がたと
ありますものを……
髪結さんの家へ行かされて結ひたくもない日本髪のお濃い衿元を心配しながら
緋がの子の手柄でかざられし花かんざしをさゝれるその間、お友達はどれだけ
先へ進んでいらつしやることでせうに……
あゝ！ 再び學び舎へとは申しません、けれどせめて圖書館だけにでも……
母様！

でも、許されぬ事實です、もがいても、もがいても悲しうございます。
あゝ本がよみたい、狂はしいまでに……
チラ／＼と額の上でゆらぐこの簪をくしやく／＼に打曲げて投げとばしたい気が
いたします。もう少し今といふ言葉を味はつて下さい。
どうぞ『女といふものは』を云はないで下さい。
あゝ、青葉の頃ですもの……まだ若い私は、心の限り高らかに歌ひたいのでござります。

たつたひとりて

ゆめなし

砂丘に黄色い月見草が月をまつて咲きます——

な、は寂しくねえ様のお便りをまつて居ります。
赤い星や、青い星が涙ぐましく輝いてお月様はまだ眠りからさめないのか顔を
出して下さいませぬ。赤い封筒や青い封筒のお便りの中になつかしい白い封筒
は見えせん。

れい子姉様！

な、は夕ぐれの丘の月見草と同じやうに姉様のお便りをまつて居ります。
夕ぐれ砂丘にたゞ一人まゐります。そして淋しい花と共に月をまつて居ります
砂の上に草履を捨て、素足でその上を歩いて居ると、赤い緒のあとがクツキ
リとついて居るのを気づきました。露にぬれたせいでせう。砂に坐はつて宵待
草の歌を唄ひます。

——待てどくらせど来ぬ人を

宵待草のやるせなさ

今宵は月も出ぬそうな――

いつの間にか涙が流れてしとくと頬をぬらしてしまひました。いつか頂いたお手紙はな々の長い袂に、又洋服のポケットに大事に大事にかくされてあります。

あのお手紙をいたゞいてから、な々の指は幾度くりかへしながら折られました御病氣だつたなら……あゝそんな筈はないけれど……

胸に秘めた姉様故、といふ人もありません、唯お祈りします。

「神様!! どうか私の姉様をお守り下さい」と

向うの林の上が仄に明るくなりました。お月がくく出るのです。

しかし姉さまのおたよりをお待ちします。

私はやつぱりたつた一人お便りをまします。夜露にぬれて寒くなりました月にぬれながら歸りませう。

さよなら

又逢ふ日まで

ジョージさま、

ジョージ御兄様、暖春の神戸の埠頭で悲しいつきぬ御別れをしてより知らぬ間に又思出多い冬が日本をすつかりおほつて了ひました。今日は朝から紛雪がふりしきつて六甲の山々は淡く灰色に煙つて居ります、この頃はもうアイス、スケーチングする多くのウインダースポツマンがどんく山上の池へまゐります

けれどこのな、子はもう一緒につれてゐつて頂く方——ジョーシ様あなたが
らつしやいませんもの。

お部屋でたつた一人ストーブ燃える音を耳にしながら、なつかしいおたよりを
かいて居りますの、去年は私にとつて一番楽しい幸福な時でございました——
貴方につれられて寒い冬の晩。厚いオーバーにくるまつて音楽會の歸へりなど
暖かい紅茶の香をなつかしんだり——。長い沈黙の冬が去つて青草の萌ゆる高
原の春をドライブしたのもみんな——今はなつかしい甘い思ひ出の夢になつて
しまひました。

今まで、くろがねの殿堂の奥ふかくはぐくまれてゐた私の心には初めて見たエ
キゾナツクな明るい生活がどんなに大きな強い魅力となつて私の胸をおどらせ
た事でせう。

お別れの前の日、私達が初めてお目にかつた思出のパーティーで、しみじみと
私をみまもり乍おつしやいました、ナナ子ちゃんがはたちになつたら、僕は日
本へきつとかへつて來ると、

その抑揚のある滑らかなアクセントが今もはつきりと耳にのこつて居ります。
どうしてすみなれた日本を後にあんな遠い英國まで遙々と、おかへりになつた
の？

思ひ出します。單にあなたのお父様と私のパパとが、商買上の取引があつた
が故に國籍をことにした、私達があんなに仲よくしてしまつたなんて

御出發のまへ數日といふ時お忙はしい中を元町へ私をつれてゐつて下さいま
したのね、
腕に引つかゝるやうにしてゐる私を見かへつて

(もうナナちゃんとききに左様ならね)
今度歸つて來たら今のナ、子であるでせうか……と淋しげにおつしやつた時、
私何がなしと泪ぐんでしまひました。

それはほんとうに物なやましい春の夜でございましたもの、その時寶石屋で買
つて下つたすつたエメラルドの耳飾りは今快い重量で、ペンの運びにつれて私
の耳原でたえずゆらめいて居ります。お別れのしるしにとあたたかい微笑を共
におくられた時いつもならお手にブラ下つて大喜びしませうものを……
妙に胸が一ぱいで何んにも云へませんでした、あなたのお言葉のまゝ再びお逢
ひする日迄大切に――持つて居ります。

ではジョージ様――もう三年ね。

その内にいろいろなことをおけいこしておいて、あなたをびつくりさせて上げ

ませう。

では夜も更けました。

外はもう雪も降り止んで蒼い月明の夜です。

では又逢ふ日まで　　すこやかにゐませ。

あなたの　　ナ、子

――春を待つ――

君子さま私の校庭の模様をお知らせいたします。

庭のはだか樹にさむい木枯が吹いて居りますのであの可愛い、ブルムラも、チ
ューリップも芽ばえません。

私たちはごんなに春の日をまちこがれて居りますか輝かしい春の日ざしに浴しながら櫻の若葉の下で小鳥のさへずるのをきくますと、どんなに私たちの心はおどることとせう。

春よ、一日も早く来てあの枯木に縁に若芽をつけ、小鳥に歌はして下さい。

今日のおたよりはこれだけ

御へんじは生田先生の月夜の野ばらといふ詩をかいとおきましたの

「空には月がかすんでゐる

野には野ばらの花がうるむ」

「白いほゝかぶりして

娘よ、娘よ、村の小娘、どこへ行く」

「どこへも行かぬここへ来た

このいゝ香ひの花かげへ」

「眼には涙を一杯ためて

娘よ、娘よ、村の小娘何を泣く」

「何にも泣かぬ、涙ではない

乙女心のたゞ夜つゆ」

「あれ見よ月は冴えて来た 野ばらの花は白雪のやう」

温泉宿の夜を

あたよりを申し上げます。それは本當に違つた気分です。

沖のかもめに潮時きけばーヨ

私しや立つ鳥波にきけ

だれか男のひとが小聲で唄ひながら浴室へゆく階段をおりて行きました。後はまた元の静寂にかへつてチキン、チキンと火鉢の火のはせる音ばかりが夢のやうに響くのです。

重くるしい沈黙何んとか云はなけりやいけなと思つてツと顔を上るとたん、

にいさんの微笑を含んだ瞳とぶつつかつてあわて、瞳をひざにあとしてしまひました。あゝ早くお父さんがお湯から出ていらつしやればいゝのに——晝間折つて來た木蓮の花が知らない間に一ひら疊の上におちてゐます。黄色い電燈の灯にてらされた花びらのなやましい程の白さ。宿のむすめの弾くもの佗しき三味の音がしづかに階下から響いて來ます。雨でも降り出しさうな晩です。こうして常住、變ですけれど、幾日も幾夜もすごして居るのです。

都の友へ

來ん初春の宵に

みのる兄さま

おそろひの水色のスタンドのやはらかい光で兄さまからのお便りをよみました……事務室で本を読んでもそこらにまだ「乙女の姿」「しづ心なく」が散らばつて居ます、たゞ手がさきに出さうで困つてゐます……

兄さま！ 私もまだあの夜の興奮からさめ切らずに朝鮮ひげをはやされたK兄いさんや、ビエロのやうな一夫さんの顔がちらついて居りますのよ。

兄い様もつとこちらにいらつしやつたら、もつと面白く遊べましたのに……と思ふと兄さまをそちらへ呼びかへした電報がにくらしくなります——。おや何んですつて……

……一番心残りでしやうがないのは貴女の顔へおしろいでヒゲやマルをかく事が出來なかつた事です。でも私が、四日急に歸社したので貴女も生命びろ

ひをなされましたね……

ですつて……ひどい方、あたし何も生命びろひなぞいたしません。兄いさまこそ生命びろひをされたのでせう。ヤレ〜助かつたと思つてゐらつしやるのでせう、さうよ、もつとひどい顔にしてあげたかつたのですけれど、大法學士様の體面を思つて片方のおひげ丈で負けておきましたのよ。

またそんな悪れ口をおつしやつちや、來年こそ、本當に來年こそキツトビエロさんのやうにしてあげますからお覺えてゐらつしやい。ピーだ。アラ、アラ、また……

……併し本年のお正月が一番面白い最後になるだらふと思ひます。來年はKさんは卒業前でお忙しいでせう！ 貴女はおよめさんにいつておいでだらふし、小生一人ビエロを相手にカルタを取つても面白くありませんからね……

ですつて!! まあどこまでいぢわるなんでせう兄さまは……

あたしがあよめさんにいつてしまふ……このあたしがホ……はゞかり様、でもあたしはまだそんな大人じやありませんことよ、お裁縫もお料理も何一つ満足に出來ない甘つたれつ子のあたしがどうして、そんなにおよめさんなんかにゆかれるもんですか又ゆけたつてゆきませんわよ。

それよりお兄さま自らこそ、もうすぐ美しいとてもステキなおよめさんをおもらひになつて、もうそんなお轉婆娘とは遊んでやらないよ——なんかおつしやりそうですわ、どう、ちがひまして、

でも、もしかしてほんとにそんな事になつたら、あたしどうせう？ さびしいわ——本當にさびしいわ。

ねえみのる兄さま

約束して頂戴！ 兄さまがおよめさんをおもらひになつても、やつぱり今のやうに遊んで下さるやうに……ね……きつとよ……。
あうれしい、そしたら又來年も今年のやうに面白くあそべますわ本當にうれしいことよ。

……
おや、大分夜がふけてまゐりました。

ずる分おしやべりをしましたわねえ

又、雪でもちらつくのかひどく底冷えがしますわ。この弱虫が又風邪でも引くやうなことがあるといけません。さようなら、おやすみなさい。

兄さま、御身をおいとひ下さいますね。

病床から

淡い黄昏がもう窓の外まで迫つてゐます——そこはなんとなくつかしい匂ひをあたりにたゞよはせて——

ホーホー突然、小鳩の時計が六時を報らせました。

(あゝもう時間だわ、皆さんそろそろいらつしやる時分)

私の胸はどよめきはじめました。初め、結つた高島田が氣になつて姿見の前を行つたり來たりして母さんに笑はれてしまひました。嚙脂にほかした淡黄色の宵待草の花匂ふおふり袖に嚙脂と銀のたづなの帯を胸高くしめて、緋鹿な子の帯上げをそつとのぞかせて、それが今宵の私の晴れ姿——

知れる限りのお友達が廣いお室間へだん／＼に姿をあらはします。小原さま、黒ばらさま、星丘さま、潮さま……いつもあてがれて居る皆様がすつかりお揃ひになります。

外はもうすつかり夜のとばりにおははれて、新月の淡い光が硝子戸をとほして廣間へしのびよつてきます。断髪——耳かくし——高島田、桃割——お下髪、洋装——おふり袖——元祿——皆さまがそれ／＼お好みのお姿でやはらかに、息吹と華かな笑ひ聲と美しい移り香とがとろけ込んで、廣間は青いお月夜の花圓のように皆さんは、それからそれと面白い話しにうつります。

私の空想は、私の夢はいつもこれなのです。勿論日中の夢なのです。

三重子さま！

春の野にたつ陽炎の朝は悲しく消ゆる白露のそれにも似たその淡い、はかない私の夢がもし、實現さるゝ日が來ましたなら……その時には三重子さま貴女を第一番にお呼びしますわね。

私の病氣、もう大分よいの、安心して頂戴、ねてゐてもちつとも寂しくありません。あなたのお便りと私の空想とが。いつも／＼なぐさめてくれますもの。

ではまた。さようなら。

三重子さま



絶海の孤島

誰にもさからふとせぬわが性を
やさしと思ひ來し愚さよ

思ひ出は懐しいと多く人の云ふのにわれは喜志子様のみ歌の心のやうに愚かしく生れたればこそ身はこの苦惱に陥つて居ます。

綾子さま。

人の子思ふ凡下の心人妻のこの身にひめた悲しい思ひ出をさいて下さいませ。夕日が出るにはまだ少し早いと見えて遠い沼の方からは蘆の香りを送らふとて

ヨシキリの啼く聲がかすかに聞えてゐます。

「今晚は……」ハツとどろく胸をジツトおさへながら、そつと立つて縁側の障子をしづかにあけると、まされもない、そこにはニッコリと微笑んでKさんの白地のゆかた姿が「お兄さんは？」と尋ねる。「あの今御風呂に入つて居りますの、どうぞおかけ遊ばして」「ありがたう」「アノもうすぐでご座いますから」「え、有り難う」「まあKさんですか、よくいらつしやいました。さあおかけなさい、修さんはすぐ出ますから」とお母さんは湯殿の方に向つて「修さん、Kさんがいらつしやつたよ」と聲をかけました。すると中から兄い様が、「ア、修さんいらつしやい。僕すぐ出ますから縁にでも腰かけて待つてくれ給へ」と元氣のよい聲で返事すると思ふと同時にジャブ／＼急にやり出したので修さんも、母も私も一緒にドツと笑ひ出してしまいました。「僕あの今停車場の

ところを通つて來ますと月見草が澤山さいて居ましたから採つて來たんです。これあの修さんに上げて下さい」とKさんは心持息をはずせながらかう言つて夜目にもくつきりと白いゆかたの小脇から、右手にしかと握つた月見草を取り上げてお出しになりました「マアきれいでございますこと、もうこんなに澤山咲いてますの、どうも有りがたう。さあちやん、いたゞいて、しほれない様に水につけてお置きなさい」母にかう云はれても何んだか母の見て居る前でKさんの手からその月見草を受け取るのが面映ゆかつた「ありがたうございます」小聲でお禮を云ひ乍、おののく手を差し出すのでした。Kさんの手にしつかり握られて居たのか仄かな暖か味が月見草を通して私の掌にそのまゝそつと傳はつた時私は人知れず胸ををどらせてそつと握りしめました。そして何んとなく涙ぐましい氣持ちにならずには居られなかつたのです。母に

言ひつけられて、兄が風呂から上つて來る間Kさんを案内して裏の蕁畑へゆきました。しつとりと夜露は二人の裾を濡らしました汗で赤く染まつた指先を動かして、一つ／＼苺をつみ取つてはKさんの掌に行儀よく並べて上げました。けど、二人とも黙つて遂々一言も話ませんでした。それでは私は何んとなく今の自分がこの世の中で一番幸福の人間の様に思へてなりませんでした——思ひ出深いその年も暮れて庭の青桐の梢に合歡木の葉蔭に 蛸が寂しくも逝く夏の調べを告げるあくる年のことでした。門の稲田にはもう黄金の波が立つて初秋の風が寂しく野を吹いて居りました。休暇も終つて明日は都へ歸るとして訪れて下すつたKさんを圍んで御晝飯を食べました。虫が知らずか、何んとなくしめり勝ちな話題のとぎれ目とぎれ目を庭前の唐もろこしの葉ずれの音が人々の心の底にしんみりと食ひ込んで行くので

した「では左様なら」「お大事に」互に言葉を交はしてKさんは庭へお立ちになつたが、又チラリと此方をふりむいて「秋もだん／＼深くなつてゆくのですね」と寂みしさに微笑みました。

「ちやあ元氣で大いにやるんですね」と兄が力付けの言葉で又口々にお別れの挨拶が、くりかへされるとKさんは一人寂しさに秋風に吹かれて遠く都へかへつていつてしまひました。

切り株ばかり残つた田の面を終日本枯の風が吹き通して窓硝子がコト／＼と音立てる頃、かりそめの床についた兄の病氣は俄にあらたまつて、遂に歸らぬ旅路へ赴いてしまひました。父ない家に今病身の一人の母を抱えて私は、妹の登志子と二人で途方にくれてしまひました。でもどうかその日その月も無事におくることが出来まして、翌年の四月には二人ともそろつて高女を優等で卒業す

ることが出来ました。然し今となつてはすべてが夢でした。唯病身の母一人が涙を流してよろこんでくれることによつて私は心ならずも人に嫁ぐ身となつたのでした。

皆な私の寂しい宿命でした。そして古い時代の女でした故伯父や親戚のすゝめにも一言の言葉さへのべられず、とう／＼嫁かねばならぬ身となつたのです。嫁ぐ日も式場でも、いつも心に残つて居るのはKさんのことでした。兄さへ居たらばと由ない繰言も胸に湧きました。

幾星霜は夢と過ぎました。まあ何んと云ふ運命のいたづらでせう。夫と住んだ町の隣家は偶然にも忘れもしない、あのKさんのお姉様の別荘だつたのです。私は悲しい心の痛手にふれられるのをおそれ乍らもつひ隣同志で心安くしてしまつたのです。私はその頃、身體の工合が悪く毎日ブラ／＼寝たり起きたり

して居りました。

梅の花のさく頃も、桃の花の散る頃になつても依然としてよい方に向ひませんでした。青空でないでゐる雲雀の聲が、ねてゐる私の室にまできこえて来る頃幾分か快い方に向つたとお医者様から言はれまして、お天氣のよい暖かさうな日などに真白い李の花がホロホロと散つて行くのを障子の隙き間からやうやう見遣ることが出来るやうになりました。

それは暖いある日のことでした。夢ともなく現ともない境からふと眼を覺まして、何處か遠い場所で美しいピアノの旋律をかなでてゐる様に思はれて思はず頭をもたげてじつと耳を傾けました。その時ふと私の心に浮んだ面影はもしや、あゝ、でも矢張り夢か知ら、つひぞ瞬にのぼつたことのないのさうさうみんな夢なのだわ……愈々冴えてくるピアノの音に誘はれて、遂に私は

立ち上りました。帯をしめ直すと髪を繕つてその儘羽織を打ちかけふら／＼する足を踏みしめて庭へ出ました。裏庭傳ひにKさんのお姉様の別荘へはゆかれるのです。木々の緑はまぶしい程目にしみ入るし、葉越にのぞく青空があまり強く胸を打つのでございました。

歩一步近づいてゆくと私の胸は、裂けるばかりです、けれど、けれど、一杯にはもう何物に對しても逡巡はかへ見られませんでした——、唯なつかしさが一杯であつたのです。このまゝこの芝生にたふれてもいゝと思ひました。

……中のピアノの音がハタと止んで真白い障子が音もなく開きますと、其處にはKさんの姉様がニコヤカな微笑で優しく私を迎へて下さいました。

何んと云ふことでせう、そこにはKさんが居られたのです。姉えさんは乃夫さん、久しぶりでさあちやんに何か弾いておきかせなさい。さあちやんお上りな

「さいな」姉さんは失禮しますと立ち去つたのでした。
 Kさんと私とは二間も間を置いて、座はつて居ました。お互に三四年振りで會
 ひながら、云ひたいことは山程ありながら、こうして面と向つては何一つ言ひ
 得ずに黙つて居るのでした。私が多まつてうつむいた時、私の指にチラリと光
 る指輪を見たK様の瞳はなじるやうな寂しい光でした。苦るしさに堪へかねて
 さけつゝふと見た庭先には白い木蓮の花がポツカリと散つて行くのでした。再
 びさびしい瞳がかはされた時、

「瘠せましたね」

いつにかはらぬ優しみの籠つた言葉でした。私は思はず涙してしまいました。
 「私は心に育て、來たひとりの人のために一生を一人で生きようと思ひます、
 藝術が私の心の妻です」

と云つた切り口をつぐんでしまいました。K様のみ言葉を脊にあびつゝ私はそ
 の場に泣き伏してしまひました。

x x x

あはれ若き人妻となれる身にかたく秘めたる思出の日に日にわが心を苛むので
 ございます。惱んではならぬ悩み、苦るしんではならぬ苦しみに憂鬱の身をい
 ためられ、いとせめてこの想ひを遠い／＼海のもなかの孤島に埋めんと願ふの
 でございます。

綾子さま。

唯お一人貴女におききしていたときたい許りに、そして永久に貴女お一人の御
 胸にこの悲しい思ひ出を秘めていたときたい許りにこのつたない書面を認めま
 した。

青 蕨 の 窓 よ り

だしぬけにこんな手紙をさし上げる子をおゆるし下さいませ。でもお名前がわかつたものですから——昨日あまり暖かだったので、私がお玄關のそばまで出てまゐりますと、ちやうど郵便屋さんが入つて來ましたの郵便を受取りながらチラとその郵便屋さんの持つて居る手紙を一つ見ましたら、その表面に橋本様方手塚松代様とやさしい水莖の痕のしるされてゐるのが眼に入りましたので、「その手塚様と仰言る方この横丁の角のお家の方でせう」ときゝますと「ハイ左様です」と郵便屋さんが答へてくれました。どんなに嬉れしかつたでせう。去年の暮頃から窓越しにいつもあなたのお姿や

お部屋の有様を拜見してゐた（失禮）人しれず憧憬れてゐた子でした。——それがあなたのお名前がわかつたのですもの。あなたのお部屋の窓から生垣をへだてた庭のなかにわたしの窓があるのですもの、青い蕨の茂つてゐる——時々その窓からそつとあなたの方をお伺ひしてゐるお下げの子の姿をまだ御承知なかつたでせうか？ わたし知つて居りますのよ、お窓の前に出て居るやさしいブルムローズの鉢植を、そしてあの薄いピンク色の刺繡のある窓かけを…… あなたは毎朝、何處かへお出かけになりますのね、どちらへ？ おつとめ？ わたし色々知りたいのですわ、わたし身體が悪くて外へ出られませんが、こんなことを云つて失禮でなかつたら御返事を頂かして下さいませ、わたし榮子つて云ひますのよ。町田榮、同じ番地でございますわ どうぞ

ブリローズの姉上さまへ

病める子より

櫻草の窓より

お手紙をいただきました。
 存じて居りましたとも、私こそ失禮とは思ひながら毎朝お邸の窓を見あげてあなたの姿の見えるのを楽しみにして居りましたの。たつた一人でさびしく暮して居る私にはそれが朝々の何よりの楽しみだつたのですもの。でもあなたの姿の見えない朝はいつも寂しい気持ちがしてゐました。
 もしやお身體でもわるいのではないかと思つて居りました、どんな風にお悪い

のでせう、おさかせ願ひたう存じますわ。
 私のこと、お恥しくつて申上げられませんが、でも折角たづねて下さつたのですもの。私、本當はみすぼらしい仕事をして居りますの、申上げませうか、でもあなたは私がどんな仕事をして居る女か御見當がつかまして、私、タイピストですの、たつた一つ覚え込んだこんな卑しい仕事で、親も知邊も何もないこの東京で、どうにか人様のお部屋をかりてくらしして居りますのよ、どうぞお笑ひ遊ばさないで。
 わたし、どんなにあなたのお身の上をお美ましいと思つてゐたこととせう。でもこんな私のやうなものがあなたのやうな結構なお身の上の方とおちかづきになれませうか。私、何んだか、それが氣になりますの。
 夕方つとめから歸つて来た時にはいつもお部屋のお窓が閉つて居りますのね、

私、あなたのお窓の閉つて居る時、何より悲しうございますの、そして私もいそいで自分の窓をしめてしまひますの。
いま、夜の七時、御飯を頂いて窓際の机によりかゝつて居りますの下手な字でさつとお讀みづらいでせう。

青窓の姫さまへ

(お怒り遊ばさないで)

醜さものより

青 萬 の 窓 よ り

嫌ですわ。姫さまなんて、わたしそんな結構な身の上なんかじゃないわ。それどころかわたし、それは薄倅な娘に生れついてゐるのです。いつかお目にかゝ

つて何もかもお話したいと思つてゐますのよ。
それよりもわたしどんなに貴女の御境遇が、羨しいか知れせんわ。さうして自分の手で働いて誰の世話にもならないで生きてゆくことがほんとうだと思ひますの。タイピスト結構だと思ひますわ、どうして卑しい仕事なぞと仰言るの
でせう(わたし、もしかしたらあなたさうではないかと思つてましたの失禮)私
も何かあなたのやうなお仕事の一つ欲しいと思ひますわ、でもこんな病身の子
ですから到底駄目でせう、わたしの病氣それこそ申し上げずにおさませう、わ
たしだから戸外へは決して出ないことにしてゐますの、誰にも逢たくない、何
處へも行きたくない、かうして一人でもつと椅子に埋れて好きな蓄音機をさい
てさう云へばそれこそ何か結構な境遇のやうに見えませうけれど、さうじゃな
いのよ、わたしそれは悲しい苦しいこと一杯なのよ。

でもわたしどんなに嬉れしいでせう。わたしなんかの手紙に（あんなぶしつけなことをかいた手紙に）御返事など頂けないだらふと思っていました。そしてあの日はわざと窓をあけて（午後は醫者がいけないと仰言いましたけど）そつとあなたのお窓の方を伺つていましたの、わたしあなたの上半身が窓から見えずぐまた閉めておしまひになつたのをよく知つてましたのよ。

今朝はとりわけプリムローズの色がきれいでしたわね、新しいのと變つてゐたのではないかしら、そしてお部屋の壁にかゝつてゐるあの肖像畫はあれは誰方のですの？ よく見えますませんでしたけれど。

わたしのこさへた小さいレースを一つこの手紙の中へ入れましたお笑ひ遊ばさないで。

憧れの姉上へ

不幸な姉より



櫻草の窓より

レースを有難うございました。いたゞきますわ。

私今日はおそく歸りました。仕事がおくれたからです。ぐたく／＼に疲れて歸つて来る時、それは／＼悲しうございます。でもこの頃はかへつてから、すぐ窓を開いてあなたの方を見上げるのが何よりたのしみになりました。途中の電車のなかでもそのことばかり考へあなたのお手紙が机の上のぼつてゐるのを何度も心のうちに描きながら、いそいで家路をたどるやうになりました。

晝のつとめはそれは／＼煩いこと計りで、どうかして一日も早くこんな稼業か

らぬけ出したかと思つてゐますけれど、外に身に覺えのあることと云つては一つもなし止をえないことゝ詮めて働きつゞけてゐるのです。何も差上げるものもありません。下手な歌を一つ二つかいて入れました。私にとつて何よりのなぐさめだつた歌も近頃めつたに書きませんお笑ひ遊ばせ。

塵に埋れし子より

鸚鵡の窓の君へ

今朝あなたの窓に吊し出された白いあうむに気がつきました鸚鵡があなたのお聲を傳へてくれたと感ひます
……有像畫のこと……あれは今日壁から下して下りました

返子より

濟みません、こんなところへ来てしまひました。お醫者と家の者がすゝめてどうにもこんなところく來ねばならなへなつてしまひましたの。それで返事がすつかりおくれました。でも身體は大した變化もございせんからどうぞ安心遊ばして。私が居なくなつても鸚鵡だけは窓へ出して置く様に家の者に云つて置きましたそんなに永くここに居るつもりはないのですから、その間どうぞ遠くからあの鸚鵡を可愛がつてゐてやつて下さいまし、あれはわたしが永い間可愛がつてゐた鳥です。

今は夜です、波の音が聞こえます——あなたはどうしていらつしやるでせう。わたし何だかあなた、濟まないやうな気がして、少しの間ですからどうぞを堪忍遊ばして、

お達者でゐて下さい。

都の姉上に

病める妹より

青空はあまりにひろし窓にあるプリムローズにけふも見入りつ……お歌が一等好きでした、けふも踊んでゐますの……

返子より

お怒りになつて？ でもお手紙が来ないので、わたしこればかり心配し

てゐますわ。それともいつかのお手紙のやうにお勤めがおいそがしいのでせうか？ ハガキでも結構ですから——

わたし、物をよんだりかいたりしてはいけないと云はれました。

今日東京から母さんが来ました。

磯千鳥

戀しき姉上へ

返子より

どうなすつたの？

人の眼をぬすんで、ちよつとハガキでかきました。

今日から看護婦が一人ふえました。

病める子より

櫻草の窓より

許るして下さい

永い間お手紙を上げないでどんなに御心配をかけたでせう。毎日さう思ひつゞけながら、つひ書いてゐる暇がなかつたのですもの。

榮子さま、私は會社を止めました。いろんな事情があるのですが、そんなことを一々申上げては仕様がなと思ひますから止めますわ、どうしても會社を退かなければならないことになつてしまひましたの、けふ一切の手續をしてしまひました。

新しい運命が私の上にもちて來さうに思はれます。私の生活も一變すること

でせう。あなたとの忘れがたい交りのいと口をつくつたこの窓とも二三日のうち別れを告げねばならないかも知れません。

鸚鵡がけふもあなたの窓につるつされてゐます。時々思ひ出したやうに何か云つてゐる聲が聞こえますが、その聲が、何か私の今度の決心を止めてゐるやうにも思はれますの。どうかするとその聲があなたの聲のやうに思はれて何か濟まない申譯のないやうな氣もしますの。

でも、どうか私のことをいつまでも忘れないで下さいね、短い間のゆき、でしたけれど、そしてとうとう言葉を交す時もないあなたと私との交りでしたけれど、私はあの窓をいつまでも忘れません。あなたのお姿をいつまでも忘れません。

どんな雨風が明日からの私におそひかゝるでせう。でも出来るだけそれと闘つ

て行きますわ。

自分のことばかりかきました。あなたの御病氣はその後いかですか、そればかり案じつとけてゐました。どうぞ達者になつて下さい。そして一日も早くあの鸚鵡と青鳶の窓へかへつて下さい。私はまた人知れずあの窓を仰ぎにまゐりたいと思つてゐます。

ではたつた一度だけから呼ばせて下さいぬ、妹よ。左様なら

流浪の姉より

返子より

.....



蘭の花

油氣の無い黒髪を惜し氣もなく引裂紙に結んだくし巻！ 亂れすぎた後れ毛の下からのぞく白いひたひ。細そりした身をつんだお召の素給。上品な體つき乍氣のない着付。かてて加へて強すぎる宵風にのび過ぎた雜草を通して亂れ勝な裾にあらはな片はぎ、年は十九、二十か、名はお蘭とか。今宵又お近くその凄艶な女姿！

頃は徳川末期

お蘭とよばれた女は二三ヶ月前から國さかひにある山路の中腹に、冬は獵にたつきをつなぐ作三の小屋を見つけて、いつの頃から住ひ、里人たちには江戸のもので蘭といふ名の外は明さず、又とふ人あればやさしう村人にもてなしの言葉。

親切な村人の心配する野菜や米穀が小屋つきの鍋にかしぎの煙を立つるを思へば山賊の一味とも思はれず——ある時は膝の上に書物を、又ある日にはなまめかしい紅筆の文などつとて——

さて夕暮になれば、雨なき日毎、ふもとの沼邊の残照を見にとつてか、しづかな歩みをくりかへすのみ。

それ者の果てかとも思はれず、武家出を思はせる固くるしさ。かくて今の年も梅雨。

久しくものうい雨の日がついて、彼女の姿も数日見られなかつたが——

梅雨ばれの熱ばんだ陽がさびしく青葉に照りかへりつゝ、心よげに山の端に休む頃になつてもお蘭の姿は黄昏の田畑にはたらく人々の前に例の姿を見せぬやうになつた。

「作三の小屋の娘御はこの頃どうしてじやの」「寝てかの」「ハテさう云へばこの頃とんと見かけぬ」小さい山里の人達全部に、噂されるやうになつた。

ある日、作三は晝の休みを泥足のまゝで、人々の集りからはなれて、山へ登つて行つた。

空には雲がながれて初夏近いこの山里のそこにもこゝにも見なれぬ花がつばみをもつてさき出してゐた。

「不思議じゃ、娘御は小屋には見えなんだ。お主等たれも見かけなんだとすり

や、どこかへ行かれたのじゃ、わしの小屋つきの道具の外何もない……いやあつた、これがな、大そうながさじや」

一同の目は紙包に集まつた字をげせぬ人々には例の紅筆の皆々様とのみ走りがきにしたのがわからんたが、中味は里人が始めて見るやうな莫大な小判！直ちに庄屋に急を告げた。

人々の暮しにかゝはりなく自然は營みをつとける。野のみどりは次第に深みました。梅雨があがつて見知らぬ花のつぼみは日々太つて行きました。

やがて――

あの人達は涼しい鎮守の社前につどひ罪のない話に更くる夜をわすれる八月となつた。

が、うはさの話の中には最早彼女も蘭はなかつたのでした。

平凡に生きて行くのをこの上もない幸として居る村人にとつては彼女の謎の消失は大した考へをもたらしめなかつたのか――

謎の美女、若く美しいそして腕のすぐれて、兄の仇をうつてから世をはかなんだと噂されて居たお蘭についてはその夜都のさる大名に興入れたと――否、山賊にかどわかされた――とりくの取沙汰もいつしか消えてしまひました。

置さわすれてか、不用になつた物か、かの紅筆、それさへ二三の人の手にうつされた後、どこへどうなつたことやら――しかし、彼女の姿そのまゝを見知らぬ花はさびしくも、うるはしく山里を匂につゝんだ、里人たちは

「お、蘭さままだ」と叫びました。

心ある人は山の蘭にたづねよ。この草だけは謎の美女の出奔真相を知つてはる

まいか他にとくすべもないのは彼女の行衛でした。

露子さま——

私は山里へきてこのお話を村の人々の口からゐろりの傍で聞いたのです。江戸をのがれて、なほその都を偲び、紅筆さへもすてながら尙惱んだ美女は人の手に生かされて、故郷の江戸へかへつたのではないでせうか、山の蘭を一本お送りいたしました。

山里に

あきら子

露子さま



白ゆりの花にそへて

ゆりはつゞましい花よ
少女をおもはする花よ

うつむきて

夏のゆく日のそよ風に

都の友へ！

山里からたよりを……

そとふりかへる花よ
ゆりはしほらしい花よ
乙女の曲に泪ぐむ花よ

—二 信—

「うす紫のあけぼのに、ほゝ笑みて立つ君にして」
「いともおぐらきたそがれに、さしぐみて立つわれなりさ」
「さみうつむきて足もとの、にはひてさける赤き花」
「一つをつみてほがらかに、笑ひてわれになげたれど」
「あはれわが掌にうけし時、花はくだけて散りうせぬ」
水谷先生の詩よ。
さようなら

青い晴衣

青い晴衣を着て出ると
今朝はことさら幸福な
うれしい旅行に立つやうに
空もはれぐいたします

青い晴衣で野をゆけば
風もひらく夏景色
どこかで祭りもあるやうに

クラリネットの音もします

青い晴衣で街ゆけば

青葉若葉の下蔭で

風にゆられて花のやう

あかるい心がちぎります

兄い様へこの詩をさしあげます。

そして私は今幸福です。

乙女であれと

それでいいのだよ。

お前のところにうつる人生をさうむづかしく、やゝこしく屈折させなくてもいいの

單純で、純真で、さうだよ、お前の二三年まへまでの、あれでいいのだよ。

田舎むすめでゐたころは

可愛いがたであたんだよ

ほんとだ。

苦勞まけ、それも半ば架空的に自分で妙にこしらへあげた幻の苦勞にまけて

しまつゝ後が、まあこの頃はひどく目につくではないの、そのうしろ姿に腫に
神経質にうごく眉にそれから唇のまはりに表はれる悲劇的なその姿……ね。
かじみをよゝみてごらん？

自分の不明、おろかさ、不注意から招いた人生の至極普通な苦痛を、わざわざ
悲痛らしく深刻らしく絶叫して大げさに表現した、お前はあゝいふ種類のよみ
もの、その通りの心の持方をしてはゐやあしないか？

あれが一番いけない、あんなよみものを讀まないがいゝ、やゝもするとお前の
若い神経を病気にしやすいから。

決して逃避的なあきらめや、浅薄なイージーゴウイングをかとする謂ではない

んだよ。わかつてるね！ たゞね、あの種のいはゞ怠慢なすきまだらけの生活
を裏がきする血みどろの苦しみだとか、狂はしい涙だとか、まだまだいゝんな
誇張をすつかり自分の上に事實の如く思ひこんでね、人間の當然うくべき苦難
を、そして誰もが雨の下草の葉のやうに一樣にうくべき、それをあたまの中
で特殊なものにつくりかへて、ひどくないたり、苦しがつたり、それに耐ふ
ることは大變にえらいことの様思ひこむあれなの、ね、つまらないことだら
ふ？

そんな妄想にとらへられては大事な個性や眞實の感情をおとしましてはまはない様
に――

わるいまやかしものにとらはれない、清らかなやはらかなお前の純情でお前

のまはりを見てごらん。
それはじつに唯一の美しい神秘ののぞきめがねだよ。
ほらお前の足もとの大地をそれでごらん！
さア、そして街を隣人をごらん。

お母さま

寛子

棋の生垣から土蔵の白壁がちよつとのぞいて、かすかにもれて来る虫の音はこの家の淋しさを物語つて居りました。

「構へだけは大きいけど……この間死んだ人が一代にすつかり金をつかつてし

まつて、誰に云ふとなく母の聲をき、流しながらふつと立ち止まつて見上げた家の標札――

「……………」目をかすめた門柱の文字に私の心はおのゝきました。

+

病む人の室に母のはいつて行つた後、獨りお縁に腰掛けてきれいな物わびしい庭を見ました。咲き亂れて居る萩の花にこの家の主の優しい心がそゞろに偲ばれて……………」

「あのね、あのお室に小母さんがお休みだからお前行つて挨拶しておいで」そつとさしやいた母の聲にはつとしながら、でも思ひきつてそつと襖を開けました。

派手な緞のお床につままれて、床の間の紫苑におつと見入つて居る人の青白

い頬に二すぢ、三すぢのおくれ毛がみだれて……………

「あのお體は……………」

こちらをお向になつた黒い御眼

「あゝひいぢやんなの、大きくなつたね、逢たかつたの、…………逢ひたかつたの…………たまらなく…………」弱々しい唇からかすかにもれて来る泪の聲にたまらなくなつて、そらした私の眼からホロ／＼と流る、涙…………おさへても流れくる涙

夕ぐれにこの家の人達は皆歸つて來ました、お姉様の作つて下さつたお料理をいたゞくにも咽喉がつかへて、幾度涙が頬をつたはつたことでせう。

三つの年にお別れして十六の今はじめてお目にかゝつた本當のお母さま。

家にかへつても、あの日のことが忘れられなくなつて「あいたかつた…………たまらなく」「え、お母様、ひろ子こそお逢ひしたふございました。」美しいやさしい人をお母さんと呼ぶことの出来る。私の本當の兄弟達が涙の出る程ねたましい。

恐らくは又いくとせか、お逢ひすることの出来ないであらうお母様、山一つへだてたこの地からお母様の幸、このひろ子にいのらせて下さいませ。

いとせめてすこやかなれや。

いとせめて…………と病める母なる人に――

カナリヤによせて

胸をはり、ひとみかじやかせて、ひねもすうた唄ひしカナリヤよ。

あゝお前のうたに病む者の心はどんなに力づけられたことであらふ。おとづれる人もないこのごろを、お前だけは朝に夕に、かはりないやさしさをもつてなぐさめの歌を、はげましの歌を唄つてくれた。それなのに、あゝ、それなのにいつの日からお前の聲にさびしいひとさを感ずるやうになつた。

美しい聲がだん／＼かすれて、あゝ、今日はとうとう歌はなくなつてしまつて。

小首かしげてあたしの顔をジツト、みつめてくれた可愛い、瞳も今日は力無く

とぢられて……

お前の様子が變はつてから、私はどんなに心をいためたことか、私は自分の病氣もわすれてお前の恢復をおいのりしたのに……

しかし今日はいよ／＼いけなくなつたね。

やはらかな胸毛がかすかにふるへて、あゝお前は何んといふいたましい様子をしてゐることだらふ。

おゝ、おゝ目をあけたのね、光りのないひとみを、どこを見て居るの首をあげて、

空を、空を、あゝ空がなつかしいのか、今日も元氣におしやべりしてゐる。あの小雀がうらやましいのか、

おゝさうだらうとも、さうだらうとも、あたしだつて、どんなに丈夫で華やい

で居るお友達がうらやましいか知れないものを、
お前の瞳に白いみ空の雲がうかんで見える。
じつと雲を見つめてゐるのね、

お前の生命そのまゝの果敢なさを浮雲の中に見出したといふのか、やがてあえなく消えて行くであらふ白い雲と共にお前の魂があたしのそばからはなれてゆくのではあるまいか――

カナリヤ、お前はさぞ死ぬのはいやだらふね。

丈夫な頃のお前には何んの不足もなやみもなく唯歌をいのちの幸福者であつただけに今の心細さは一入だらふよ。

あゝカナリヤよ、死にたくないわね。

あたしも矢張り死にたくない。

生きて居ると云ふことがどんなに幸であるでせう。病むものにとつて死はあまりに暗くおそろしく、生はあまりに明るく喜ばしい。

お前の弱々しい小さな命がちやうど消えかゝらふとするローソクの灯のやうにゆれたゆたうてゐるのを知るにつけても私は私自身の生命をあやふさをそこに見るのだ。

あゝ、カナリヤよ死んではいけない、死んではいけない。

お前がなくなつたらあとに残つたあたしの歎きがどうなるのだ。

生きておくれ、なほつておくれ。

いえ／＼あたしは治さずにはをくものか、きつと／＼お前の病氣はなほして見せる。

ね、カナリヤよ、生きてゐる幸福をより大きくする爲めに元氣なからだになつておくれ。

そしてそのふくよかな黄色い胸をはつてもう一度よろこびのうたを唄つておくれ、あたしもやがて丈夫になつて共に生命の歡喜をたへやうよ。

——あたしの可愛い、カナリヤへ——

六月の宵に

六月、何て氣持のいゝ呼名でせう。

私も紺サージの上衣をぬぎ捨てました。眞白なブラウスに青葉の風を感じながら櫻並木を學舎へ通ふのです。

矢車がさきました。片戀の花だとあなたは仰言いましたね。そんなことを思つて眺めると、寂しい、氣持がします、あんまり力ない姿をしてゐるのですもの……

壓迫され、ながらも、とても寂しいながら、をとめの日をむかへた自分に似てゐるやうで何んだかいじらしくて堪らないのです。

妙さん、私はやつぱり仲のいゝ友もなくうす暗い顔をして教室の隅にぼんやり床を見つめてゐます。

もつと静な世界に生きたいと私は思つてゐますの獨り子の私と父と母との三人の生活にもしじふ黒い争ひの渦が渦巻いてゐるのですもの、傷つきやすい、ふるへ勝ちな心を抱きしめつゝ、その渦の中に泣きねれてゐる私なのです。妙さん。

私はこの頃、しきりにこんなことを考へてゐるのです。

——私は思ひます、人間は苦しめば苦しむ程死にたくなるのじやあないでせうか。

はじめて、大きな苦しみにぶつつかつた人は自殺を思ひます。その時強い人は何んの不安もなく死んでゆけるのです。けれど弱いものは死を前に行きつ戻りつふらくと考へてゐるうち、だんく寂しくなつてゆくのです。

寂しさから不安になり、そして遂に身ぶるいして又よろ／＼と苦しみの道へ引きかへしてゆくのです。

死をじつと見つめた人にはきつと、自殺は出来ないさうです。それは死といふものゝ恐怖におそはれてしまひますから、

恐怖、いゝえ、それは不安かもしれせん。

死を見つめたものは死と云ふものゝ底知れぬ深さに不安な感じを起してしまふのです。死の不気味さを感じた時こそ最も深い寂しさに胸をむしばまれる時なのでないでせうか。

妙さん。

まじめにこんなことを考へて居る私を笑はないで下さい。下らないことかもしれませんが——

誰につけたとて取り上げてはくれないでせう。でもあなたは私の氣持を理解して下さるだらふと思ひます。

こんなことをかいて居たら何んだかびしくなりました。さよならお便り下さい。

享樂の春

春になりました。小川の流る音さへ春の調べをかなで居るではありませんか。

静子さま——

荒れはた野山はやうやくさを姫のみどりの衣をかけてまわります。美しいご

ざいます、あたゝかひ恵みの光に浴みしてさき出だしました。ひばりの唄も高らかにみ空にひびいて居ります。足許にはみどりの若草がやはらかにのびてをります。

静子さま——

あなたの美しい青春の姿が、自然のうつくしい恵の中でのびくとして居ることを考へ出されるのです。

一切が春なのです。わが世の春なのです。わたくし達は清いうつくしい繪巻をひろげて楽しまふではありませんか、

ホ、ホ、乙女の時機は長くはないのです。

麗子より

うつくしい春の繪巻をひろげて拜見いたしました。

本當に春は私たちは乙女のために恵まれる自然の恩恵でございます——
まして都の花はもう何もかも浮き立たせて、私ども若人のために春の行進曲を奏でて居るのです。お遊びにいらつしやいませ——

この頃は學びの道たぞはわすれ勝ちなのです。おさつし下さい。でも、都のまはりは櫻花のために埋もれて享樂の氣分がみなぎつて居るんですもの、あたしひとり勉強なぞといふしほらしいことができませんか。
世は春です。美しい春です。
さよなら。

きみやに送る

銀 涙

きみや。
お前は本當に行つて了ふの？
そしてもううちへはかへつて来てくれないのね。

ゆうべ、あたしのお部屋へ来て、うつむいた儘「お嬢さま永いことお世話様に……」と云つたきりお前は前かけを顔にあてて泣き出して了つたので、あたしは何も云へませんでした。
あたしの大切なきみや、きみやが行つたらあたしはごうしやう學校から歸つて來てもお父様はまだお役所、お母さまはお居間でさまつて御書見、これももしこのお母さまのお腹から出たあたしだつたらお玄關からすぐお居間へ行つて「お母様唯今、あのね、明日遠足ですつて……」
聲をはずませて云ふんだけれど……悲しい運命の私、お父さまのお歸へり迄の數時間、その間寂しいあたしをなぐさめて呉れるのはお前一人だつた。
きみや、
明日からあたしはどうしやう。あたしは學校から歸つて夕方までをどうしよう

寂しくて寂しくて泣き出してしまふだらう。

あたしは悲しい。あたしは悲しい。いつそお前のお嫁入りがにくく思はれる。いつ迄もくゝゐてほしいお前だもの、あゝこんな我儘をいつてはいけなかつたのね、お嫁入りは女として當然ふむ可き道なんだもの、あたし心からお祝ひしなくてはいけないわね。

きみや。

あたしね、昨日お父様にお願ひして臨時にお小づかひを拾圓いたゞいたの、そしてそのお金で今日松屋へ行つてきみやに似合ふ銘仙を一反買つて来たの、あたしは柄を見ることが下手だけれど：：ね、きみや、あたしがあげるのだから少し位柄が氣に入らなくても辛抱してね。

それから一緒につゝんである寫眞ね、之はいつかお前があたしに呉れたおかへ

しなの、お互にいつまでもくゝ思ひ出させうね、忘れてはいや、忘れちゃいや！

きみや。

今日あたしは一日中胸が重いの、そしてお前の顔も見たくないのきみや、きみや、十時四十五分の姫路行の夜汽車でいつて了ふのね、どんなにあたしが泣いたとて……。

きみや。

御婚禮のおしやしんはきつと送つて頂戴ね、待つてゐてよ、可愛い顔したきみやの花嫁姿が早くみたいこと――

この手紙は、お前が恐らく涙で眼ぶたを赤くはらし乍ら、あたしのお部屋へお別れに来るとき黙つて、えゝ本當に黙つて別の包みと一緒に渡すつもりなの、

そして、あたしは見送りにも出ないつもりなの、きみや苦ししい胸をさつして
頂戴。

夜行列車の淡い電燈の下で、この手紙をよんでゐるきみやを思ひ浮べながら筆
をおきます。

病氣をしないでね。

私とおないどしの

きみやへ

漂 泊 の 兄 へ

兄さま

妻は今日もこの母様の眼られてゐる丘へたゞひとりさまよつて來ましたの——
地上の凡てを抱擁してゐた蒼空はもうこい桔梗色に、くれながら夢の薄絹の
やうな乳色の霧がしつとりと丘をつつみました。あゝ、和かい淡い夕方の空
には宵の明星が……それから淋しく腰を下ろしてゐる妻の足下には黄色い愁を
ひめた月見草がそよ／＼とそよいでをりますの。

兄さま

貴方のお心は千枝にはよく解つてをります、深い苦しみと悩み、妻たちの恵
まれない境遇……その冷たい十幾年間の生涯の爲に貴方はつひに聊かな家庭の
温さや人間の愛に深い疑をいだかれて家出なさいましたのでございました。
妻達の生みの母、限りない恨みを抱かれ、そしてそれを妻達にまで永久に憎し
みをつゞけ遊ばされようとする現在の母様！

所詮妾達はあの方の愛の翼に育まれることは出来ません。あたし達がどんなにお慕ひし、可愛がつていたゞかうと一寸の間も心をこめて努力してもそれは無駄でございました。ある日は涙を流して不行とゞきをお託をし、愛を幾度お願ひいたしました事か、されど冷い目をもつてみつめられたのみでございませう。ほんとうの人間の心と云ふものは……かく迄も冷いものか、あらゆるものに運命的に忍従してゆかうとする妾にさへはげしい悲しみと苦しみが浮ぶのを禁じませんでした。

兄様

けれ共、現在の母様も寄る年波とともに肉體の衰弱をいなむことは出来ませんでしたの、妾はこの頃何ものをも愛することの出来ない不幸の人「左様でございませう、人間は愛されるより、何ものかを愛して生くることの出来る人が幸

福であると信じます』

凡て心に性格的缺陷が出来て社會の人々との間にさへ愛の尊さを知らず運命になく惨めな人、その人をどうして捨て、行かれませう……冷い人を暖い愛の手で杖となつて上げませう、憎悪を虐待の十いく年をしので家にゐる妾にはいづもさう思つてゐるときが幸福でございませう。

兄いさま。

ふとある日發見いたしました貴方の古い日記の一頁に

俺は今宵もあの灯影の少い街を歩いてゐる、秋も深んだ、このうら寒い街を曇つた灰色空にはあちらこちらに星が暗くかゞやいて夜風がさむく着物の裾を吹く、おゝあの向うに見える家の窓で……女の笑聲がする。さうだあの赤い灯の下には温い家庭があるのだ！、歌留多をしてゐるのかしら？ 大人の聲

の中なかに交まじつて子こ供どもの聲こゑがする一いっ家か、同どうのむつまじい團だん樂らく……何なんんと云いふ美うま
しいことだらふ

——場末の一ぜん飯屋にて——

いつも夕暮ゆぐれになると御飯ごはんも食たべずに家いへを出でられ十二時じふ過ぎまで歸かへつて來こられ
なかつれ兄様にいさま、その時母様ときかあさまは下女げじよに言いひつけていつも門もんを閉しめてしまひなさい
ました。常に「物質ぶつしつが何なんです」と父様ちちさまに云いはれた貴方あなたでした。お友達のS夫様せむさま
が「黒闇くろやみを好このむ男をとこ」とか云いふ題だいで同人雜誌どうじんざしに貴方あなたの性格せいかくを創そ作さくなさいました。

——それは貴方あなたでした。

兄様……

貴方あなたと母様かあさまとの間あひだに家出いいでの前夜ぜんや交かされたお言葉ことば、それはどんなにこの千枝ちえの胸むね
をえぐつたことでせう、義理ぎりの母ははの言葉ことばを信しんじて行ゆけば愛着あいやくの兄あにを失うしなふ兄あにの言こと

葉はに肯かげば恩義おんぎの母ははを見みかへせなければならぬさうしたデレウマにとらはれさ
うした冷つたい家庭かていの争鬭せうとうを見みなければならぬ妻わの眼まなこにはたゞ熱あつい涙なみだが惨じんでまゐ
りました、何なんんと云いふ悲かなしい宿命しゆくめいでせう。けれども千枝ちえは信しんじますわ、今いまさつ
と貴方あなたの運命うんめいの開拓かいたく遊あそばされたことを。そして妾わたしは妾わたしの行ゆくべき道みちを眞まっすぐに
進すすんで行ゆきませう。自由じゆうや希望きぼうは若わかき心こころにもえてゐますけれど苦くるしみと運命うんめいに
服従ふくじゆうして一ひ人りの老をいたる人ひとをたすけることは悲かなしい妾わたしの誇ほこりでございませうわ、
けれ共とも、やがて最後さいごにどんなに冷つたい母上ははじょうであつてもさつとこの妾わたしを憐あはれな可か憐れん
な心こころを知しつて下くださいませう。

兄にいさま、あたしはいつも貴方あなたがかへられる日ひの早はやかれと神かみに祈いのるのを忘わすれた
日はございせん。

では……

……運命うんめいに忍しのび従したがつてゆく……

妹いもうとより

百姓の娘から

路子

町の詩人さん。

都のお嬢さん。

そこでジツト私を眺めてゐてはいけませんわ。

私は働けなくなるんですもの

はつきり説明することは出来ませんが、一日中とても心持が悪くて降り

うで降らないお天氣のやうにうつ／＼してしまふの。

まあ絹のストッキングをはいて

労働の神聖を高唱なさらふといふお方

貴方の行先の方向は定まつていらつしやるなら、さつさと行つて貰ひますわ。
もしも貴方がポケットブックをお持ちになつて——詩をおつくりにお出でになつたのなら私達の氣にふれさせないやうに——せつせと歩いてそつと眺めて下さ

マア素的なお召物！

私達はそんな立派なおめしものは展覧會以外では滅多に見られはしませんわ。

私にはこの働くきものと、外にたつた一つの紅い着物——お祭の時とお盆と、

お正月に着るんだもの——しか無いのよ。

あなたは何しにいらつしやつたの。

随分やせていらつしやるわ、でも貴方の眼は素破らしいわね。海邊の別荘から

逃げて来たの？

心臓が弱いんでしょ、だつてお父さんが言つてたは、都の心臓の悪いお嬢さん達の顔は青く、そして皆んな海岸の別荘で海の息を吸うんでだつて。

何んて細い人でせう。貴方の脚は、

それぢや働きたくたつて働けはしませんわね。

貴女が走りたがつても貴女のお父様か乳母車におし込むんでしょ。

まあ可愛さうに。

でもあんたはこゝへ来ては不可せせんわ。

貴女はお庭に花園をつくつて、ダリヤを植えるといゝわ、それから、いろんな西洋の草花がうゑるのがよくつてよ。

お父さんが、まあ、まあ

こんなおくれでしまつて、

おてんと様が赤くなつたわ、もうくれるといふのにまあ。

でも祈る時はいゝわ、一番いゝわ、ミレーの晩鐘以上だと思つて、その時のお父さんつたら私、知らないうちに泣いてしまつたわ。

初めのうちは如何にしても分らなかつたわ、だつて年貢を納めるために年がら年中働いてるやうなんだもの、朝は早くから……このまへまでは、あんなに寝坊だつたのに、

この頃はすつかり働ける女になれて、私も随分うれしいわ、

私は雑誌一冊買ふにも特別にお小使をお父さんにおことはりしなければいけないのよ。

私達百姓の娘にはお小遣なんてぜいたくものよ……私達はお金なんかちつとも

持つてやしないわ。
だけど馬鹿にしちやいけないわ。
町の詩人さん
都のお嬢さんたち。

異端者の手記

妙子

この手紙をA子さんに……………。

異端者よ！

反逆の子よ！

悲しき妙子よ！

Sさん――

Yちゃん――

A子さん――

みんなみんな幸福な人！

キャンプ、ファイヤを取り圍んで自信ある口調で神と、信仰とを説く、恵まれ
た人達――

さうしてひとりぼつちの反逆者、妙子……………

吉屋信子さんの「屋根裏の二處女」の主人公はなんて正直でなんて大膽な性格
なんでせう。

「……若し神さまを眼の前に見ることさへ出来たらその時こそ

あたしは神さまを信じませう——」

本當に素破らしい素敵な言葉なんでせう。

一年前まで妙子は決して、決して、あんな子じやなかつた筈だ。

「疑ふ」と云ふことを知らなかつた素直な魂……つひこの間まで持つて居た
魂……それは一體どこへ行つてしまつたんだらふ。

解らなくなつて仕舞つた、

何もかも、みんな解らなくなつてしまつた。

光明は消え失せて、残るは底知れぬ闇ばかりだ。

どうすれば好んだらふ

この深い淋しさと冷たさと悲しさとは一體どうしたらいいんでせう。

光明よ！

光明よ！

あゝ絶望ばかりだ……。

もえあがるキャンプ、ファイヤ……

闇のなかに浮かび上がる赤く照らされた皆の顔——

幸福にかどやく顔……

でもあたしたちの背後には底知れぬ闇が押しせまつてゐるじやないか。

ユダよ！

御身の苦痛にみてる顔を、今こそハッキリ見ることが出来る！

(キャンピングから)

月夜のしらべを

つゆ子

去りやらぬ夏のけはひに——さなえ様佗びぬれて、わびぬれてつゆ子はみいるやうでございませう、つめたく青い氷にも似たさびしさがひし／＼と追つて……

聴いていたといたとはれない思ひ——けれど夜露の重みにうなだれる月見草のさいろいしづくを振りおとして、さみしくあはれ何のよそひもない生ひ出たまゝの月見草となつて泣けるだけ泣きたいと思ひます。

夏の夜の螢火に似たはかない想のかず／＼を、さなえ様、あなたはいつものやうにさいて下さるでせうねえ、

ラヂオの夕は樂章にアレクロー私の儂ない思ひと涙を胸一杯に秘めてたゞへて私のだつた愛の路もかくこそとむせびいりました。

アングロー、燦爛と銀の征矢をいる白日の陽の下、ぐる／＼めぐる日向葵のそれのごとく、自らをもやした熾烈な焔のなかにあへいでました、とゞめおはせぬ禮讃のときめき、真赤のやうに夜明けの雲のいろに燃える熱い情熱、まだ世なれぬあわれな魂はみじめにもおど／＼ふるへて破るゝばかりでした。

激しい混乱のあとには氣味わるい物靜かな沈黙がつゞきます。すさまじい狂亂の後にじつと自己の心の底の底までみつめて、兩の眼がありました。

しかし、その眼はたえず涙にぬれその眼光はそよ風にゆらいであるのでした。正しい愛が、赦される愛なのか私には分りませぬ。

月光、それは物思はしむる人に、物思はせようと造化がつくつたのではないでせうか、その青白い光の下にどの様な思ひもわき出づるではありませんか。

あゝ月夜、私は本當にこの大自然の美しい調べを喜ぶのです。永くなりました。この手紙をあなたのお傍へさしあげます。

腫をあげて森を、海を、大空をのぞいてごらん……ね、どう？ 素直に、正直

にうつすころはやがで神祕をうむ胎なんだと云ふことがお前にうなづけて？

花賣から

いつも、人様から爪はじきされてゐるやうな氣がしてなりません。

貧しい家に住めるために私は毎日お花を街道に、人足繁き街の四辻に立ち悲しい聲を前の大きな建物に向つて、

「お花を、お花召せ」

とよばねばなりません。

でも、こんな大きな私に、足を止めてお花の一束を買つて下さる人は少ないの

です。
私は勿論、それを氣にも止めませんが自分の紙入のお錢を數へる時大きな吐息が自然にもれるので御座います。
人氣の少い裏街をかへる時、病に苦しんで居る父の顔が……私の顔をかけまはります。

私は泣いて來ます。

母が歿つてからは、父の熱心に勞働する日も少なくなり、フトした風邪が元で病の床にふせつてしすひました。

父はその日生活をする勞働者の例にもれず、私達のかてはたゞれてしまひました。

父の熱は高まります。

不安定の生活の爲に薬をもとめることは不可能でございます。

母なき私の唯一のたよりは父だけでございます。

父も母と同じ所へゆかれては、私は、小さな私はこんな荒浪の人生行路に立つて歩むことが出来ませう？

私は父が病から抜け出ることをごんごんに願つてゐることでございませう。

父の事業も先年の財界不況の爲にしくじつてしまつて、一介の勞働者になつたのでございます。父は再起に奮勵しましたが……

勞働者の子の私にどうして、安閑な日がございませう。私は學校を止めて賣店

の賣子になりました。自分の將來より今の自分の家庭ではお錢でございませぬの。

母は勞働者生活の中に永遠に旅立ちました。

私達勞働者の家庭にはいつ夜明の近づくことでせう。いつも雨ふる夜のやうに真くらでございませぬ。そこへ父が病に倒れました。

私が賣れのこりの花をもつて、明るい歩道をあゆんでゐる時、友達の眼はどんなに光ることでせう。でも私は父を救ふみちは唯一つと一心に明るい人多い街に「お花、お花」と呼びつゞけます。

美しい花を賣るにはあまりに見すばらしき我姿

暗い小さな電燈は破れた障子にも父のやつれた顔にも平等に光つて居ります。私は暗い電燈の下でマツチのレツテルをはらはなければ一日の課程は終らないので御座います。

父が安らかに眠る其ひま／＼十年前の故郷が偲べれますやはり故郷のなつかしさは胸が一杯になります。

故郷に居つて營々と農事にいそしんでをれば母も無事で父もますます健全だつたかも知れませぬ。

周囲の人たちの黒い眼は私をさげすんでゐるのでせう。それとも私に對する賞讃の眼でせう？ いえ／＼私は人様から貧しい子よ、みにくき子よと嘲笑されてゐるのでございませぬ。

私の今は悲しいと言ふのでせうか、又神の試練時代でも言ふのでせうか。私はたゞ父をすくひたいばかりに光りに向つて進んでゐるのでございます。

マルゲリットは華やかな女優生活をして居た。彼女の一頻には萬金を擲つ貴族もありました。マルゲリットはそれらの異性には一顧も與へませんでした。そして唯一人の青年アルマンの爲に初めて女らしい戀を許した。然し女優な華かな生活は永續はしない。遂に肺を病んでたふれた。然も華かから尤も悲惨な終末をつげた。マルゲリットは死ぬるまで愛人を呼んで、遂に行くべき所

へ逝いた。

その最後までの手紙日記は女優の様な女にも斯うしたもゆる愛があるかとうなづくことが出来る。

胸にかざした、紅白の椿一輪、それは美しい、儂い、短い夢でなくて何んでせう。

手紙日記

十二月十五日――

今日は十二月十五日です。二三日前から加減が悪るかつたが、今朝はとうとう臥りました。陽氣は陰氣です――氣は滅入つてしまひます。誰一人傍に居てくれる人はありません。私は今貴方のことを思ひます。

アルマン様！ 貴方は私がこの手紙を書いて居る時何處にゐらつしやるでせう？ 巴里からズット遠い／＼國にゐらつしやる事は人づてにきいて居ますが貴方は私のことはもうお忘れに成つたでせう。心細う存じます。

兎もあれ、お仕合せでお暮らしに成る様に私が一生涯の中、ホンノ僅かな間楽しい時を過しましたのは貴方のお陰でございます。

今日も私は加減が悪うございます。どうせこの病氣で死ぬるのでせう。私はいつも天死するやうな氣がしてゐましたし、母も肺で死にました。私がこれ迄して来た様な生活はこの病氣を重くする許りです——そしてこの病氣が母の遺してくれたたゞ一つの遺産です。ですがあなたに私のことを、よく解つて頂かない内は死ぬにも死なれません。

あなたがお歸へりになる時、お立ちになる前、あれ程愛してゐらつしやつた

憐れな女とまだ思つてゐらつしやるとすれば、どうしても申し開きをしなければなりません。

アルマン様！

プウジヴァル（二人で世帯を持つて居た地）へお父様がお着きになつた時、私達二人がどんなにどろいたか。貴方は覚えてゐらつしやるでせう。その到着のために私が思はず恐怖を起したことや、貴方とお父様との間に起つた後のことと貴方はまだ覚えてゐらつしやるでせう。

その翌日、あなたが巴里にお出でになつてお父様を待つて居るその留守中使ひの者がお父様の手紙を私に渡しました。その手紙は翌日何んとか口實を設けて貴方を留守にし、お父様に面會してくれと極く眞面目なお頼みなのです。そ

してその事を貴方に絶対に秘密にしてくれと云ふのでした。

その翌日、私は無理やりに貴方を巴里へお出かけなさる様勧めたのです。貴方がお出掛になると、一時間経つか経たない内にお父様がお見えになりました。

お父様のむづかしいお顔を私がおんと思つたかは申しません。お父様は娼婦な
 んてえものは人情も道理も知らない。金でかへる機械のやうなものでたとへば
 鐵の機械のやうに何かを差出す手を捲き込み、自分の生活を支へてくれる人を
 人情も何も見境なく滅茶々々にしてしまふものゝ様に一途に考へてゐらつしや
 る様子でございました。

お父様の仰言つた言葉をちとめると、お前故に息子の身を過まらせるに忍び
 ない。全くお前は美しいが、その美しい容貌を利用して大金を費はせて若い者
 の前途をあやまらせるのは怪しからぬことだとおつしやるのです。

これは貴方も御承知のことですが、私が貴方の戀人になりましたから、あな
 たの下さる以外に、餘計な金をあなたに使はせまいとあなたの身を思つて、私
 は出来る限りの犠牲を拂ひました。私はこれまで私の借金は家財をうり拂つて
 かへし、あなたには厄介をかけぬやうにして御一緒に世帯をもつ決心で居りま
 すことをお父様にお話いたしました。そして私達の幸福のことや、私があなた
 から楽しい生活を教へて頂いたことをお話いたしますと、お父様もお解りにな
 りましたか、私の手をとられて初めの仕草をおわびなさいました。そして
 『これは小言ではない、おどしでもない。心からのお願ひだが、一つ悴のため
 にそれまでつくしてくれたより、もつと大きな犠牲を拂つて貰ひたい』
 こう前置きを伺つたとき全くふるへ上つてしましました。お父様は私の傍にお近
 づきになつて、私の手を取り、やさしくおつしやいました。

「私の言ふことを悪くもつて下さるな、この世には残酷だと思ひながら、思ひ切つてしなればならぬ事が時々ある。お前さんは感心な女だ。見上げた女だ。世間の女はお前さんの値打を知らないで、お前さんをさげすむかも知れないがお前さんは並の女とちがつて心掛けが良い、然し人間は一生情婦でゐられるものでない。家族と云ふものがある。色戀の外に義務もあれば熱情の時代に次いで分別盛りと云つた時代がある。悴は資産がある譯でもない。お前さんの爲に母の遺した僅かばかりの収入すら棒に振るつもりで居るらしい。それに悴はお前さんの犠牲を男の權威と面目の上からそうした犠牲をうけることは出来ないそれに世間といふものが、お前さんの好意を善意にばかり解しては呉れないために結局家名を傷つける事になる。それに世間では悴がお前さんを愛して居るが、お前さんの方で悴を愛して居るか、或は又戀が悴のために仕合せで、お前

さんの復活になるといふやうなことは立ち入つて考へてくれない。世間はたゞアルマンと云ふ男は娼婦——こんなことを云ふのは失禮だが許して下さい——が持物を賣つてその金を貢がれたのだとしか云はない。その内には後悔する時が来る。屹度来る。然しその時はもう遅い。二人とも切るに切れない絆にながれてどうすることも出来ないその時お前さんはどうする。お前さんは年がとつて盛りはすぎる。悴の行末の見込はない。そして親父の私は子供から孝行されるつもりで楽しんで居たのが慰めてくれないことになる。悴はお前さんと悴が知り合ひになつた六ヶ月の間に、アルマンは私を忘れてしまつた。四度も出した手紙に對して一本の返事もよこさない。悴はお前さんを愛して居る結果遂に賭博をします。私はそれを知つて居る。

お前さんが悴を愛してゐて下さると云ふが、それは眞實であるならば、それ

を証據だてる爲にあなたにはたつた一つの手段が残して居るだけだ、それは伴の將來のためにお前さんの愛を犠牲にする外はないのだ。

まだ詳しい話はしませんでしたが、私が巴里へ出て来たのには用件があつたのです。私には美しいまるで天使のやうな清い娘があります。その娘がある男を慕つてゐるのです。娘は戀の夢にあこがれてゐるのです。

私はアルマンにその事を手紙で知らせたのだが、彼れはお前さん許氣にして返事をよこさない。それはまあそれとして娘は愈々結婚する事になりましたが相手が名望家である以上、こちら立派でなくてはならない。所で先方でアルマンが巴里での暮をきいて、彼が現在のやうな生活をつゞける以上は縁談を破約するとの申込みです。何一つお前さんに悪いことをしたことの無い少女、行末の幸福を望む権利を持つて居る少女の將來はお前さんの手一つに握られてゐるのです。お前さん、どうか私の願をきゝ入れ、娘を幸福にしてやつて下さい

私は黙つて泣きました。かうシミ／＼云はれて見ると私だつてこれまで度々考へた事でものお言葉を承るにつけ、又つ／＼考へないては居られないでありませんか、そこで私はかう申しました。どうせ私に蔭の者です。私達の戀にどんな道理があつても、私の慾得づくとしか見えないでせう。過去の私を考へますと私にはそんな將來のことを望む権利はないのです。之まで爲し來つた事や、私の噂を考へ合せると、私が柄になく身に責任を引受けても人はそれを認めてくれないんです。

矢張り私は貴方を愛して居たんです。アルマン様、お父様の親御らしい話振りが、お父様が妾の心の中へ呼び起して下すつた清い感情を一段高くしたやうに思はれました。で、私は

「ではあなた様は私がアルマン様をお愛申して居ると云ふ事を信じて下さいませるか」

涙ながらに申しました。お父様は

「信じて居ます」

「慾徳離れた戀だと思召して下さいませうか」私は云ひました。

「えー」

「ではお嬢様に遊ばすと同じやうに妾をおだき下さいませうすれば、その接吻で——眞實に純潔なキスで私は強くなり、私は妾の戀と戦ふことが出来ると思ひます」

「あゝお様さんは實に見上げた方だ」

そう云つて私の額へ接吻をしながらお父様がおつしやいました。

私はブルウタンスの友にK伯爵の仰せに従ふから、伯爵と私と三人で夕飯を頂くやうにつたへてくれと云ふ手紙をかきました。

そして封をしてから巴里へおかへりになつたら宛名の所へ届け下さるやうお父様にお願ひしました。お父様は中に何が書いてあるかと尋ねになりました。

私は

「お子様のお仕合の爲です」

と申し上げたときお父様は最後の抱擁をなさいました。私はこの時額に感謝の涙が一雫あちたのを感じました。その涙は恐らく私の過去の罪の洗禮のやうでした。仇し男に操を許すと決心した時に私はこの新しい罪で過去を償ふことが出来るのだと思ふと誇りに輝きました。

お父様は馬車でおかへりになりました。

でも私は女でございますわねえ、あなたにお目にかゝつたとき泣かないでは居られませんでした。でも決心はひるがへしませんでした。

私のした事は正しかつたでせうか。私は今日かうした、病氣で多分死の床になるだらふと思はれるその寢床に臥せりながら、それも自分に尋ねるのです。愈々あなたにお別れしなければならぬ時が近づいた時、私がどんなに苦しんだか、實方御存じでございますか。

伯爵と夜食をして居ります間も私はまた助けが必要でした。私はどうしなればならぬか、そんなことを考へる勇氣はありませんでした。マルゲットが新しい戀人を持つ夜のことをそんなに心を痛めようとは誰だつて本當には致しませぬ。

妾は何もかも忘れて仕舞うために酔つぶれてしまひました。その翌日眼がさめ

て見ますと妾は伯爵と一緒に居りました。

恐ろしいあの晩から以後、妾のお別れ申してから妾の苦みはあなたの御存じないことで、又お察し下さることも出来ませぬ。

あなたがお父様につれられてお歸へりになつた事は人づてにきゝました。それから長い間、妾は毎日あなたから新しい辱めをうけましたけれど、妾は喜びを以つて恥しめを受けました。だつてそれはあなたが妾を思つてゐて下さる証據である許りでなく事情がすつかりおわかりになつた曉には妾があなたの迫害をうけるほどあなたが妾を立派なものに思つて下さるやうに思つたからです。

この楽しい殉難を不思議にお思ひになつてはいけません。アルマン様あなたが妾を思つて下さいましたその愛は妾の心に貴い熱情を起させたのです。

ですけれども私急にさう強くなつたのではございませぬ。私が自分でした犠牲

の實行と、貴方がお歸へりになつた日との間には随分の日數がございましたもの、私はその間に身體をつかふ必要を感じました。それは一つには、狂氣にならぬ用心と今一つは新しく入つて行く生活に堪へるだけの強さを養ふためなのでした。そして夜會だの、宴會だのに屹度出かけて行きました。いつも不養生をして早く死んでしまひたいとさへ云ひましたが、この願は遠からず叶ふだらふと信じてゐます。健康は一日一日に悪くなる許りになつてまゐります。

アルマン様！ 私の愛の最後のおしるしに貴方がどんな風にお報いになつたか死にかゝつておつしやる事の出来ない女を、どんなに怒つて巴里から追出してお仕舞ひになつたか、そんなことは思ひ出しますまい、あなたが一夜の戀をお求めになつた時、私はまるで狂人のやうに、たとへ一瞬時でも昔と今を一緒に

結びつける事が出来ると思つて居りました。貴方のなすつた事は皆な御尤です自殺……そんなことでもしやうものなら、おめでたい貴方の御一生に悔いを残すことになるんですもの。それに今にも死にかゝつてゐるものが自殺して何んの役に立ちませう。

私は魂の無い身體となり、心の無い物となりました。暫らく自働器械のやうになつて暮らしました。それから巴里へかへつてあなたの御様子を尋ねると遠方へ旅行なすつたといふことです。最早何も便るものがございません。私は貴方とお知己になつた二年前と同じ様な身の上になりました。

今一度公爵との燃へ戻さうとしましたけれど、貴方との關係で、餘り機嫌を損じ過ぎてゐて、それにもう命が長くないと思ふからでせうが、老人はとかく短氣で駄目でした。

病氣は日増しに悪くなつて行きます——私は蒼くなつて氣が沈んで、又瘦せました。戀を買ふ人は受取る前に品物を調べないではおきません。巴里には私よりもつと丈夫で、陽氣で、もつと太つた女が澤山ございますもの。私はもうすつかり病人です。公爵に手紙を出してお金の無心を云つてやりました。私は一文なしで掛取りは情け容赦もなく詰めかけるのです。アルマン様……あなたは何故巴里へいらつしやらないんでせう。もしいらつしやれば屹度来て下さるでせう。来て下されば私は慰められますのに。

十二月二十日

今日はひどいお天気です——雪がふつてゐます。私は獨り家に居ります。もう三日の間熱が出て、貴方に手紙をかくことが出来ません。毎日あなたからの手

紙を待つて居ますけれど何の消息もありません、屹度永久に來ないんでせうか本當に男と云ふものは随分氣強いものね。

私の略血はまだ止みません。あゝもしあなたが私を御覽なされたら、定めし辛い思ひをなすつて下さいませう。あなたは暖い陽氣の所に居て、胸の上に冷たい重い氷をのせてゐらつしやるやうな事はありませんからお仕合せですわ。今、一寸起きました。窓から今妾にとつては何んの關係もない巴里生活の彼方此方と行きかふ人の様子を見ましたが知合の人も二三人街を通つてゐらつしやいました。みんな足早やに、樂しげに、無頓着な聲をなすつて誰一人、妾の家の窓を見上げて行く人もありませんでした。でもねえ、若い方が、妾の容態を訊いて行つて下さいました。

以前妾が病氣した時分、あなたはよく毎日のように妾の病氣をお見舞下さい

ましたつけね、私達は一緒に六ヶ月暮らしましたのね、私は女として出来るだけの誠をつくした積りですもの、ですけれど、今あなたは遠いかけ離れた所に行つてゐらつしやつて慰めの消息一つ寄して下さらないんですもの、だけど、こんなになつたのも、あなたに見すてられたのもひよいとした機會ね——私さつと左様だと思つたわ、貴方ももし巴里にゐらつしやりさへすれば、あなたは屹度妾の部屋を出ないで、妾の傍に附き切りでゐて下さるでせうにねえ。

十二月二十五日

お醫者様は妾が毎日手紙をかくことをお止めになりましたの。全くいろんな、過去の思ひ出は熱を高める許りです、でもね、昨日は妾の所へ手紙が一本届きました。その手紙の中にかくれた優しいお情が妾にお贈り下された品物よりも

妾は嬉れしうございました。

それで今日あなたのお手紙をかきますの昨日のお手紙と云ふのは貴方のお父様からでした、それには次のやうに書いてありました。

拜啓承り候へば御許御病氣の由、妾巴里に滞在し又忤も手近に居り候はゞ直ぐにお伺ひ致すべき筈なれど、何分同人は六百里を隔て居る遠地に在り小生も當地をはなれかね如何とも致しがたく悪しからず御推察願上候お許御病氣の趣承り及び候て如何ばかり心痛致し候ひけん、今はたゞ専ら一日も早く快方に赴かるゝやう祈るより外これなく候

なほ親友S A氏をお許に伺はせ申すべければ、何分面會下され度小生同氏へ少々依頼したる用向有之候 早々

かう云ふお手紙でした。お父様の御署各のあるお手紙は私には名醫の處方より

も効目があるやうに思はれました。

今朝このS A氏が見えました。お父様に頼まれた面倒な用向を當惑してゐらつしやるやうに見うけました。お父様の代理で千二百圓のお金を妾に持つて来て下さいました。初めは妾は強いて御辭退しましたけれどお父様からは是非にと云ふことで、且つ今後も入用の際にはいくらでもと云ふ事ゆえ、そのやうに辭退しては却つてお父様が氣をわるくなさるかも知れぬとおつしやるので、妾は有り難く頂いておきました。貴方のお父様から頂くんですもの施しを受けるのは違ひますわねえ。

あなたがお歸へりになつた時、若し妾がもう死んでゐましたら、どうぞお父様に妾のこの手紙をお目にかけて下さいませな。そしてあの優しい手紙をいたゞいた可哀想な女はこの手紙をつゞりながら感謝の涙を流してお父様のために神

様にお祈りしたことをお傳へ下さいませ。

一月四日

妾苦しい日ばかり送つて居ますわ。どうして體が保てるか、われ乍不思議でたまりません、あゝ過去の生活、私はその罪を三倍にして返へして居るのです私の食堂はお友達から頂いたボンボンやいろの贈物で一杯です。その中には今後妾を情婦にしようと思つてる若い方の贈物もありますわ、ですが妾の病氣になつと原因を知つたら誰だつておどろいて寄りつかなくなるでせうよ。好いお天氣で霜がおゐてあります。お醫者様が天氣がつゞいたら二三日して外へ出て見てよろしいと許して下さいませ。

一月十日

病氣がよくなるといふ私の希望は夢ですわ。私は又病床に横はる身となりました。胸一面濕布でおほはれました。以前、私に大層もないお金をおかけ下さった方々に、今の私のこの體をお任せするとなりましたなら、どれ程の價格で買って下さいませう……

一月十二日

引ついでに苦しみ通しです。

昨日K伯爵からお金を送つて下さいましたけれど私は受けませんでした。私の方から何も貰ひたくはありません。あの方故に貴方と私と離れてそんな遠方

へ行つていらつしやるのですものねえ。明日貴方の手紙がかかるかどうかさへ
覺えないんですもの、お察し下さい。

一月三十五日

もう十一日と云ふもの毎晩少しも眠られませんか。始終息がつまつてね。

今にも死ぬか、今にも死ぬかと、それ許り思つて居りますの。お醫者様はペン
をとることをお禁めになりました。

私の傍で看護をしてくれるジュリイからの幾行をあなにかくことを許るして
くれました。

貴方は私の死ぬ前に歸つてゐらつしやらないでせうか……ねえあなたこの儘二
人はお缺れをするのでせうか。貴方が歸つてくれれば妾の病氣は直ぐにも癒りさ